成人映画

'66
NO.13

特集●

ピンク映画は映画でないか？

「ピンク映画有用論」のテレビ論争をめぐって——

激情の誘惑に崩れた十八才！不潔な大人たちに反抗した悪い仲間！

《成人映画》

監督／渡辺　護

製作●新星プロダクション

小国リカ
橘　桂子
左京未知子
松島　武
冬木喬三
桂　奈美
清水せつ

■企画／寺内伍郎
■脚本／吉田貴彰
■撮影／船橋　登

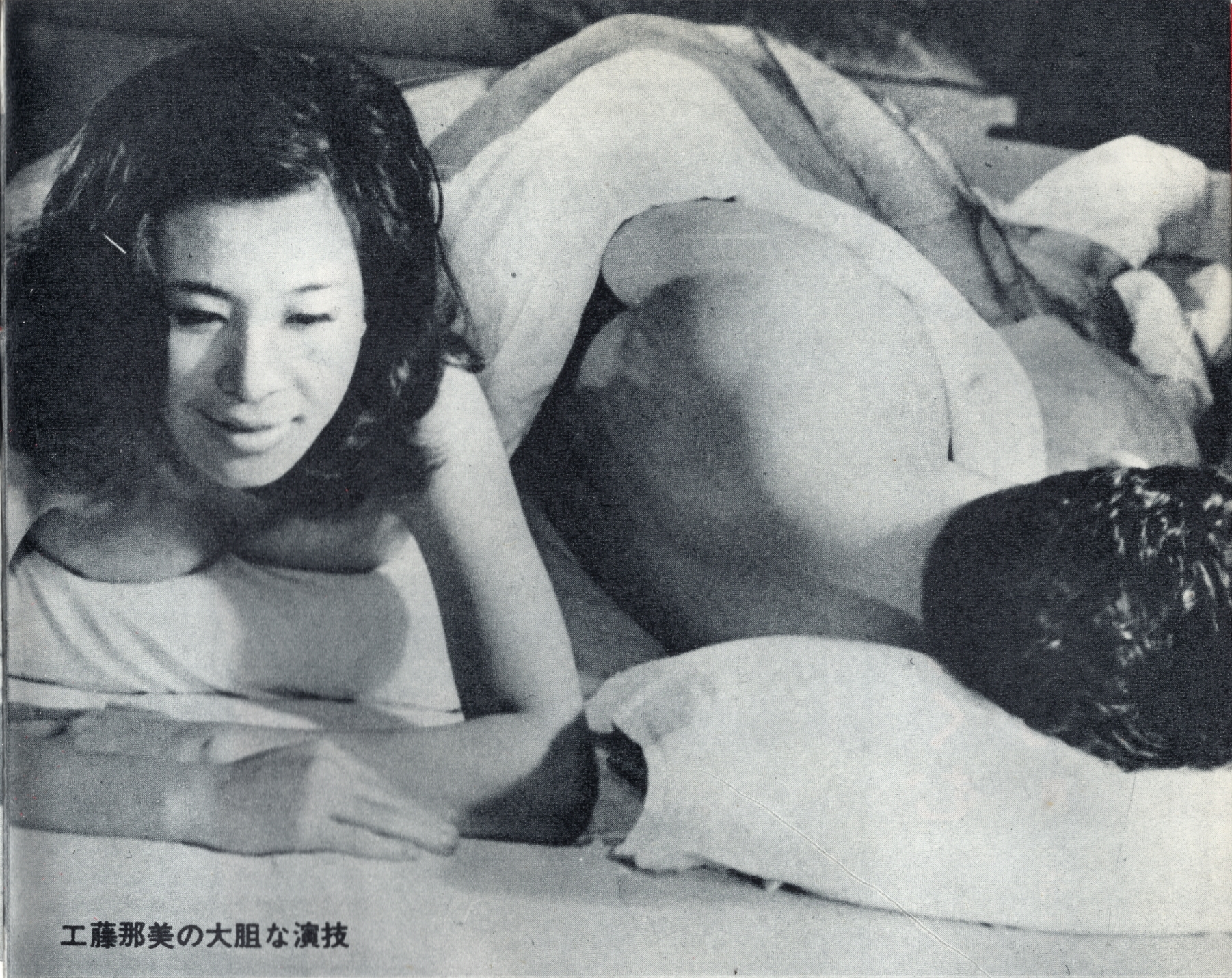
女高生ジャングル

関東 MOVIE

配給／株式会社関東ムービー配給社

SEX喜劇にとりくむ香取環の新しい魅力■

「指にかける女」ロケ・ルポ



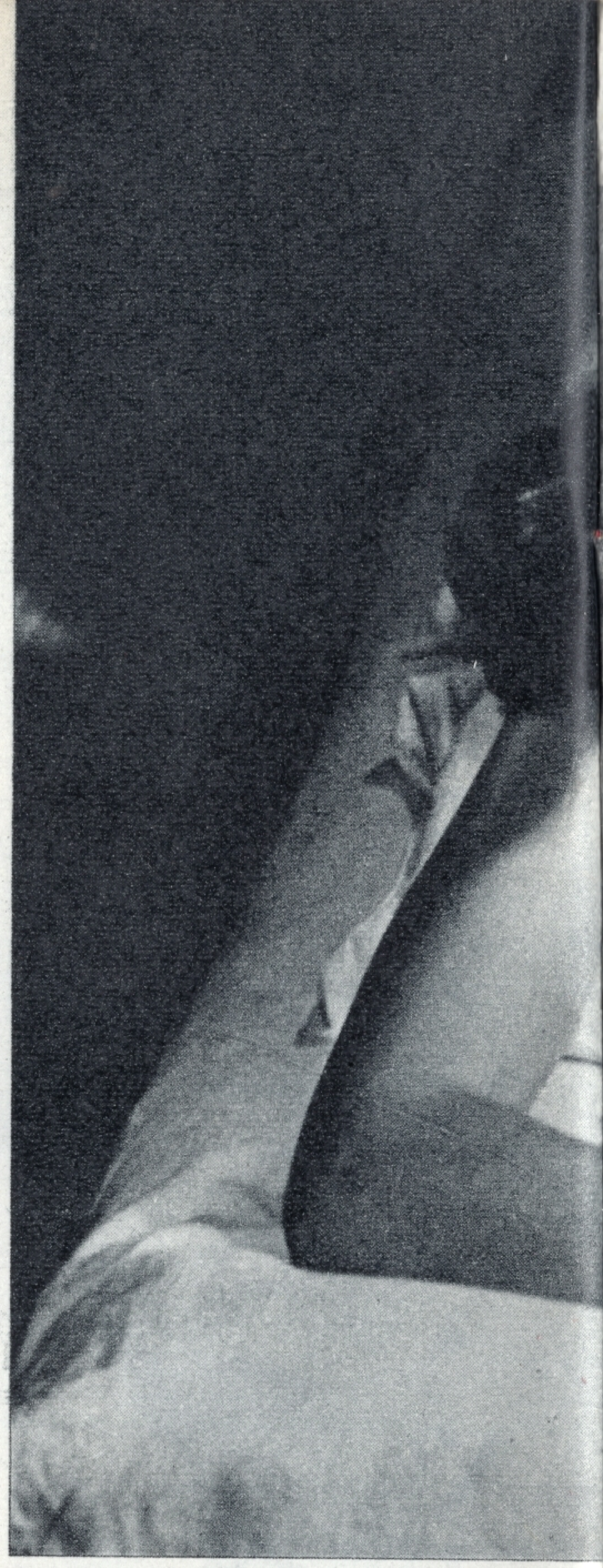
工藤那美の大胆な演技

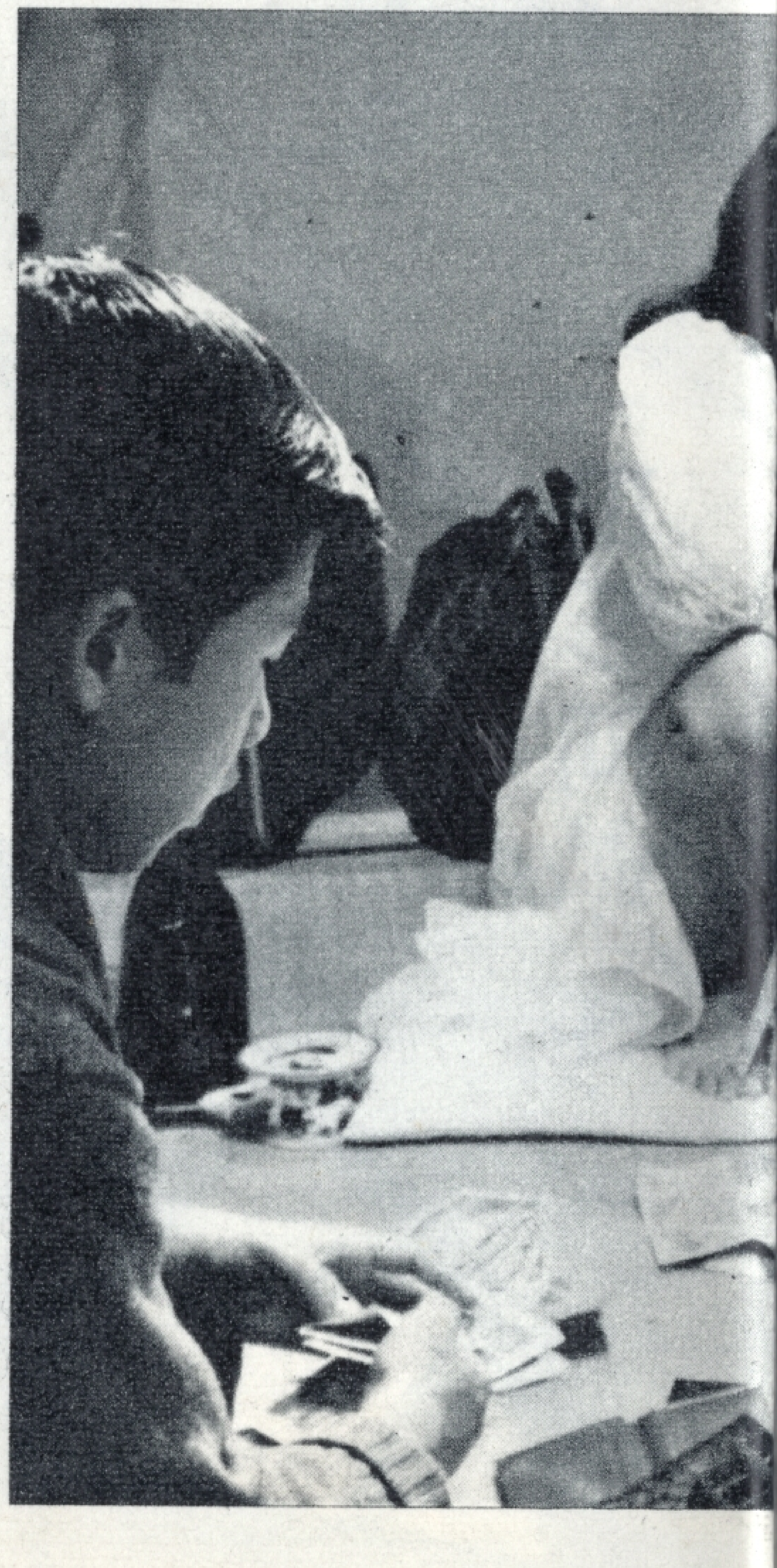
香取環の悩殺スタイル

ピンク映画といえば暗くじめじめした作品が多いが「指にかける女」（葵映画製作・配給・監督西原儀一）は、珍しくコメディタッチとセクシーなものをミックスした笑える作品。

主演の香取環といえばいつも男に裏切られている中年の女というイメージが強いが、こんどの作品では伊豆下田を背景にして、スリの女親分に扮して男を手玉にとるという役どころにハッスルしている。しかも、香取の子分の女スリに扮する工藤那美も、そのグラマーを披露しての熱演。〝色と欲〟の二股をかけた痛快な作品に仕立てている。

新しい役柄にハッスル香取環





大きな手術はしないでよ！
小川真由美のベッド・シーン（「白い巨塔」から）

■立体ワイド特集

ピンク映画は映画でない 8

＝「ピンク映画有用論」のテレビ討論をめぐって……＝

岡本—若松誌上討論……12

＝「壁の中の秘めごと」
私はあなたのために失恋の歌を唄った＝

ロケルポ　ベッドシーンがいっぱいのSEX喜劇……20

「女高生ジャングル」……23

■セクシー女優クイズ<懸賞>……16
■シネマY談・あんなハナシこんなハナシ……17
■誌上リバイバル劇場……18
■Y談風土記……19
■プロダクション・ニュース……45

成人映画

NO.13

昭和41年11月1日発行

表紙—新高恵子

現代工房／発行

<連載インタビュー>　ゲスト　■内田高子

女がタバコをやめる時……36

■クローズ・アップ／飛鳥公子……39
■スター訪問／四畳半の独り住まい　清水世津……30
■ピンク映画見たまま……34

■グラビア特集

女優　綾瀬マキ 24

内田高子のセクシーポーズ……47

ロケルポ　SEX喜劇と香取環……3

■小川真由美のセクシー演技……6
■F・アルール久々の登場……50

文学座の小川真由美といえば、映画のほうでもセクシーさを示す女優だ。大映の「白い巨塔」（監督山本薩夫）でバーのホステスで、外科医の田宮二郎の情婦役。グッとくるお色気をみせた。

田宮に「オイ、ベッドへ行けよ」といわれて、ストレートに洋服を脱ぎ、黒のスリップだけになって、ベッドの上にあお向けになるシーンである。そのときの彼女のセリフがいい。

「ねえ、これからお店に出るんだから、あんまり大きな手術はいやーよ」。

ベッドシーンは田宮が、フスマを閉めるところで終わる。ウイットのあるセリフ回しはシャレた大人のセックス表現である。この点、ピンク映画となると、ベッドで二人が粘っこいのをやらないことには気が済まないところだ。

セクシーシーンもこのくらいにまでレベルアップしたいものだ。参考になるシーンである。

有用論」のＴＶ論争をめぐる誌上録音

は映画でない

弁護に立った大蔵貢社長

映画人口が年々一〇—一五パーセントずつ減少しているが、その中にあって、ピンク映画が静かなブームをよび五社系の映画と匹敵するほどの観客を動員している。

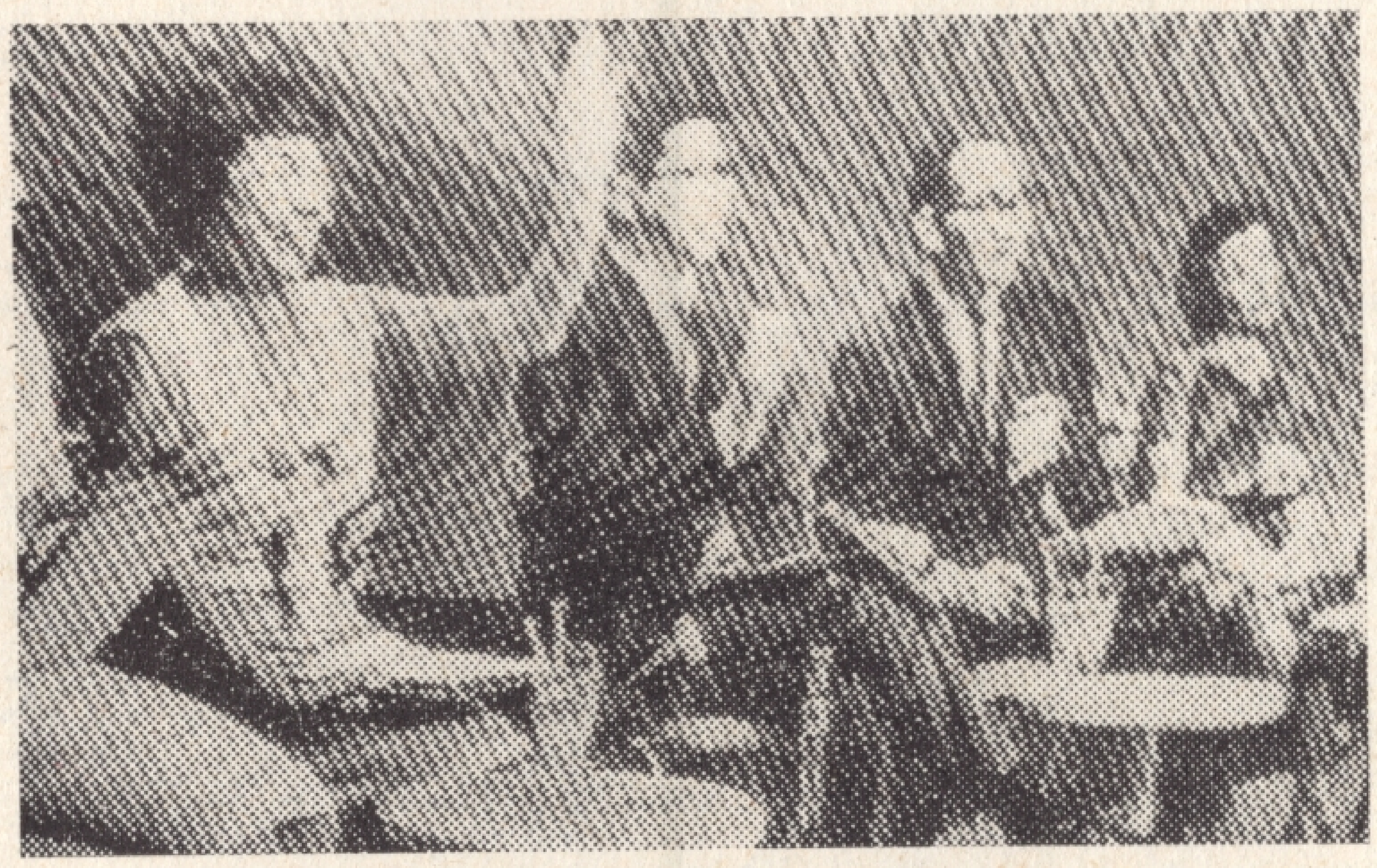
　去る十月二日「ピンク映画有用論」なるものが、東京12チャンネル夜7時30分からの「異議あり！ピンク映画有用論」で放送された。サラリーマン、主婦十五人が〝異議あり〟と抗議し、批判したが、その矢おもてに立って反論したのが大蔵映画の大蔵貢社長岡本愛彦氏が司会者となってそれぞれの主張を四十五分間にわたってぶっつけ合った。

　さて当日の実況をそのまま収録して紹介しよう。

刺激させっぱなしは無責任

岡本　ピンク映画に異議を唱える十五人の方々、会社員、主婦あり、活発な意見が期待されますが、みなさんの趣旨は低俗映画まかりならぬ、ピンク映画なくなってしまえということですが、さっそく今日の問題提起者大蔵さんのピンク映画はなぜ必要であるか、なぜやっているかをおききしましょう。

大蔵　以前「明治天皇」「日露戦争」を作って大ヒットした。新東宝をやめてからも「明治大帝一代記」を作った。これらの製作費用は七億円かかった。ところが、これがあたらなかった。そのころピンク映画がさかんになり、私も「めす、めす」を作った。それを配給したら「明治大帝」の三倍位い入った。こういうものなら大衆に受けるということになった。その後二、三本つづけてやったらピンク映画は動員数が多い、しかし作る場合は無責任な作り方はいかん。お色気の場面は時によっては露骨にいかねばならないが、最後には批判、反省、その結果、来るべきものはなにかを必らず監視しなけあいかんと、指導して今日に至っているわけなんです。



活発に意見が飛びだす討論風景

岡本　ではピンク映画に対する批判をふくめてどうぞ発言して下さい。

B（女）　ピンク映画は最後に反省や批判があれば作っても

特集1　「ピンク映画」

ピンク映画

いいとおっしゃったけれど、私はピンク映画がなぜいけないか—というのはそれをみて刺戟される人が必ずあると思うんです。若い方は観たあとの欲求の処理をどうしたらいいかと考えて作っているのか、無責任のように思うんです。刺戟させっぱなしというのはいけないと思うんです。

「情欲の黒水仙」で大胆な演技をみせた向井まり

大蔵　ピンク映画は全部私が作っているんじゃない、私は年間に七、八本しか作らない。しかし見た観客がそれによって、どういう考え方と結果になるかということまで責任をもてない。映画は教育の指導機関ではない。

D（女）　私は年ごろの子供を持つ母親として、映画は公共性のあるものだから看板なり題名なりに非常に煽情的なものがございます。自然な愛情の行為であるセックスが、若い人たちにゆがめられて受けとられるのが一番心配なんです。

大蔵　映画をみてショックを受けて婦女誘かいのような事件になったとしても、それは週刊誌を読んだり、皇居前広場や日比谷公園などに行ってそういうものを目撃して、ショックをうける人もいると思う。また暴力映画をみて刃傷沙汰におよんで、ショックを受ける人だっているでしょう。

岡本　従って問題はないんじゃないかという意見ですね。

行為だけを見世物にするな

E（男）　さっき映画は教育機関じゃないといったが、文部省選定とか、PTAの推選とか、子供に影響させる立派な作品があるじゃないですか。

大蔵　青少年のために有益な役割りを果す映画もある。

全般的に言って教育ばかり作っていたらどこの国でも映画は成り立たないんじゃないですか。

B（女）　映画は娯楽だし、見て楽しいのは娯楽だと思うんです。不愉快なものは娯楽じゃない。大蔵さんは人間の本能の弱点を使って、ご自分の

金儲けのためにそういうものが当ったから作るというのであって、良心的じゃない。

大蔵　映画だけが影響を与えるものじゃない、また子供もそういう映画をみたからってすぐ不良化するならかえってテストするのもいいじゃないか。私どもが作っている映画は成人に達しなければみられない映画です。

D(男)　よくポスターに〃十八才未満は入場お断り〃と出ていますが、実際に守られているかどうか。

大蔵　十八才未満の入場者はほとんどないと思う。もしそれを映画館が守らない場合は、きびしい罰則がある。それに満何才何カ月といって戸籍謄本までもってきて入れるわけでもないですから、たまには間違いも起こるかも知れませんがね。

G(女)　性というものは愛情の個人的な表現の行動で、それを公衆の面前にさらすものじゃない、いまのピンク映画は映画じゃなく〃エロ屋の行為〃です。映画はもっと大衆性のあるもの、健康的なものだと思うんです。

大蔵　社会にどんな影響あたえるかは、私はむしろ刃傷沙汰におよんだり、いま警視庁が躍起となって暴力退治をしているにかかわらず、ピストル一丁もっていても、すぐ検挙されて、体刑に処せられるという時代に、映画ではピストルを何発でも射ち合う、その方の影響もかなり多いんじゃないか。

岡本　拳銃とか、暴力映画があるのにピンク映画がなぜいけないか―、ということですか。

D(女)　だからといってピンク映画を肯定するという論議はおかしいと思うんですよ。

大蔵　だからピンク映画を否定するというのもおかしいじゃないですか。

「指にかける女」の工藤那美

映画は必ず亡びてしまう

岡本　大蔵さんはかつてはいい作品を何本かお撮りになっている。現在ピンク映画を作っていても、もっと期待のもてるいいものを作っていくお気持はございませんか。

大蔵　これまでも多少なりとも社会的に貢献できる話題になる作品は現場に乗り込んで、監督を監督し、指導してきた。しかし、ピンク映画の場合にはノーコメントであまりタッチしいないのです。

しかし、映画界は斜陽でダウンしつづけている。各社毎週二本の封切をやっている。しかも地方では一週間替りでないと持たない、番組を埋めるためにはどうしても安直な映画が必要に迫られているわけです。

H(男)　映画も強い刺戟を連続させて行った場合、もっと

強いものを求める。ピンク映画をみてペット・シーンとハダカの連続で内容が乏しい。そして最後には映倫をいかにくぐるかというテクニックだけに終始するだけである。

B（男） 人間生活の上にピンク的なものはなくならない。しかし映画は公共性をもっている。ピンク映画は退廃的なものだ、製作者に良心があるならば一般大衆を退廃的なものへ導くのは良心的でない。映画はもっと庶民生活を高めてゆくものにしてほしい。

岡本 大衆娯楽は単に求めるから悪循環をくりかえして行っていいものかどうか。

大蔵 いい映画を作ろうとする気持は映画人なら最大ののぞみだろう。しかしそれでは映画が亡びてしまう。

岡本 果して映画は亡びますか。

大蔵 亡びますね。邦画五社で作られている映画でさえ、これが公共性があるか、教育的、指導的役割を果しているかといったらおそらく、適確なのは何パーセントもありはしない。

ピンク映画ファンは百万人

I（男） 映画は芸術である—ということを確信していただきたい。あなたの作っているものをみると、よしこんどはあんなことやってやろうかと思う。やったことないですがね。（笑）事実みんなそう思うんじゃないですか。あなたの作品はエログロです。いいですか。芸術でなければいけないですよ。

大蔵 解釈の仕方ですよ。武智さんの「白日夢」は谷崎潤一郎の原作に忠実だったというだろうし、「黒い雪」はイデオロギーの問題を扱ったといってもみる人によってはエログロだと思うし、主観の相違じゃないですか。ピンク映画をみてセックスの開発、つまり、あれをみて学んで、欲求不満の女性にですね。一〇〇パーセント満足を与えれば一つの大きな貢献になると思うんですがね。（それはおかしいという声さかん）しかしここにおられる十五人の方が極端な反対をされるが、この種の映画をみる人は何百万人もいる。そうした人に満足を与え、その映画をみたからってすぐ帰りに犯罪が起きたとなればこれは大変な罪悪だが、現在はピンク映画によって生ずる犯罪は微々たるものだ。セックスに関する犯罪はどこにでも転っている。

岡本 これからも大蔵さんはピンク映画を情熱をもってお作りになりますか。

大蔵 告白しますと、私はピンク映画にあまり興味はないんです。ピンク映画もダウンし、プロダクションも半減している。結局はセックスの意義と、人間の正しい本能の指導に入ってゆくだろうし、いまはその過渡期なんです。

反論もあるだろうが、ビジネスだと思ってほしい。

岡本 過渡期であっても責任は負わなければいけない。若松孝二監督の「壁の中の秘事」というベルリン映画祭で日本の映画界が大変な恥をかいたという作品を私もみたんですけど、あきらかにあれは映画ではない。もっと高い時限のなにかがあるんじゃないか。人間の本質に迫ったものをあの映画に期待したい、そういった点でいいますと、残念ながら映画といえないし、ピンク映画も同様に映画といえないんじゃないかという感じがします。

特集2

「ピンク映画有用論」をめぐる論争の中のもう一つの――岡本愛彦氏対若松孝二監督の誌上論争

「ピンク映画有用論」のラストで司会の岡本愛彦氏＜演出家＞が、若松孝二監督の「壁の中の秘事」が「あきらかにあれは映画ではない」ときめつけた。そしてオマケに「ピンク映画も映画といえない」と発言した。

　この岡本発言をめぐってピンク映画関係者は〃暴言だ〃といきまき、当の若松監督も反論を提起した。

「ピンク映画有用論」が思わぬ方向に波紋をひろげたわけだが、そこで岡本氏と若松監督の双方の主張を本誌に寄せてきたので紙上討論を試みることにした。

「壁の中の秘事」考

岡本愛彦氏から若松孝二監督へ

もうかなり前のことで正確に月日も覚えていないが、若松孝二監督がテレビで映画評論家の草壁久四郎氏とヤリ合ッテイルのを全く偶然に見た確かベルリン映画祭の直後だった筈だ。草壁氏はベルリン映画祭の審査員の一人であり、当然「壁の中の秘めごと」の監督である若松氏とかなりの激論にならざるをえない。「この作品をほめている人だっていますよ」と若松監督、一体誰がほめているんです」と草壁氏。それに対して若松監督が「ここにありますよ」とよれよれのバッグから表紙の破れた週刊誌をひっぱり出してさかんにページをめくっている中にたしか放送終了になってしまった記憶がある。

当時私はまだその作品を見ていなかったので、討論として聞き流していたのだが、若松孝二と言う人には少からず興味をもった。

　第一に、とんでもない自信家が登場したものだという驚きだ。然し考えてみるとこの世界は自信家であり余程強い自我と自己主張をもった人間でなければ通用しない世の中だ。この自信は何にもまして強い監督としての適性なのか

もしれない。

第二に、おそろしく話し方の下手な人だという印象だ。然し話し方ほど監督にとって絶対不可欠なものではない。作品が＜適確＞にその思想を語っていればそれでよい筈だ。

第三に、この人は恐らく底抜けの善人だろうという印象だ。でなければあれ程ねばり強く草壁氏に喰いさがって行くわけがないと思った。

若松氏はさかんに、この映画の＜今日的必然性＞を訴え、作品は見事に日本の＜状況＞を提起していると主張していた。そして私はその後しばらくしてこの作品を友人のシナリオライターO君と一緒に観た。

私はいわゆるピンク映画というものを、この時はじめて見たのだ。そして当然、他の五社作品や外国映画を見るのと全く同じ次元で見た。これは私がテレビや演劇をそうした目で観ることと少しも変わりはしない。一千万円で作られたテレビドラマも、六十万円で作られたテレビ作品も、作家の思想の提示である点に何の変わりもないはずだ。

同じように映画も、ベルイマンであれレネであれ、ゴダールであれ、クレーマーであれ、製作予算の多い少いは見る側にとって何の参考にもならない。

新藤監督が如何に資金に苦労して撮っても作品を観る立場で不当に甘やかしてはならないのだ——と私は常々思っているし、同じ意味でたとえ三百万あるいは百五十万で作品を作ろうと、作品に対する評価がそのために浮動してはならないと思う。

「壁の中の秘めごと」を観て、正直いってこの作品の中に秘められているという思想がほとんど皆目わからなかった。

若松氏のテレビでの発言や活字に述べられていた説明的文章を想いかえしてみても、どうにも理解出来ないのだ。はっきりいって、テレビでの発言はコジツケのようにしか思えないし、もしそうでないとすれば観念が先行して、それが思想として映像に定着しなかった——としか思えなかったのだ。

それよりも、私にとっては映像の不出来が気になった。照明もカメラワークも、一つの思想の適確な結集と表現というには余りにも足りないのだ。演技も幼く、そして悲壮的にすぎオーバーに見えた。

私はニューヨーク派の若い監督や、シネマテークを中心にしたフランスの貧しい有能な監督の作品を何本か見て来た。乏しい資金で大胆に映像＜イメージ、思想＞にアタックしている人々の作品だ。駄作も沢山あったが、秀作も多かった。そしてそれらはいずれも独自の思想を語りかけてくれた。

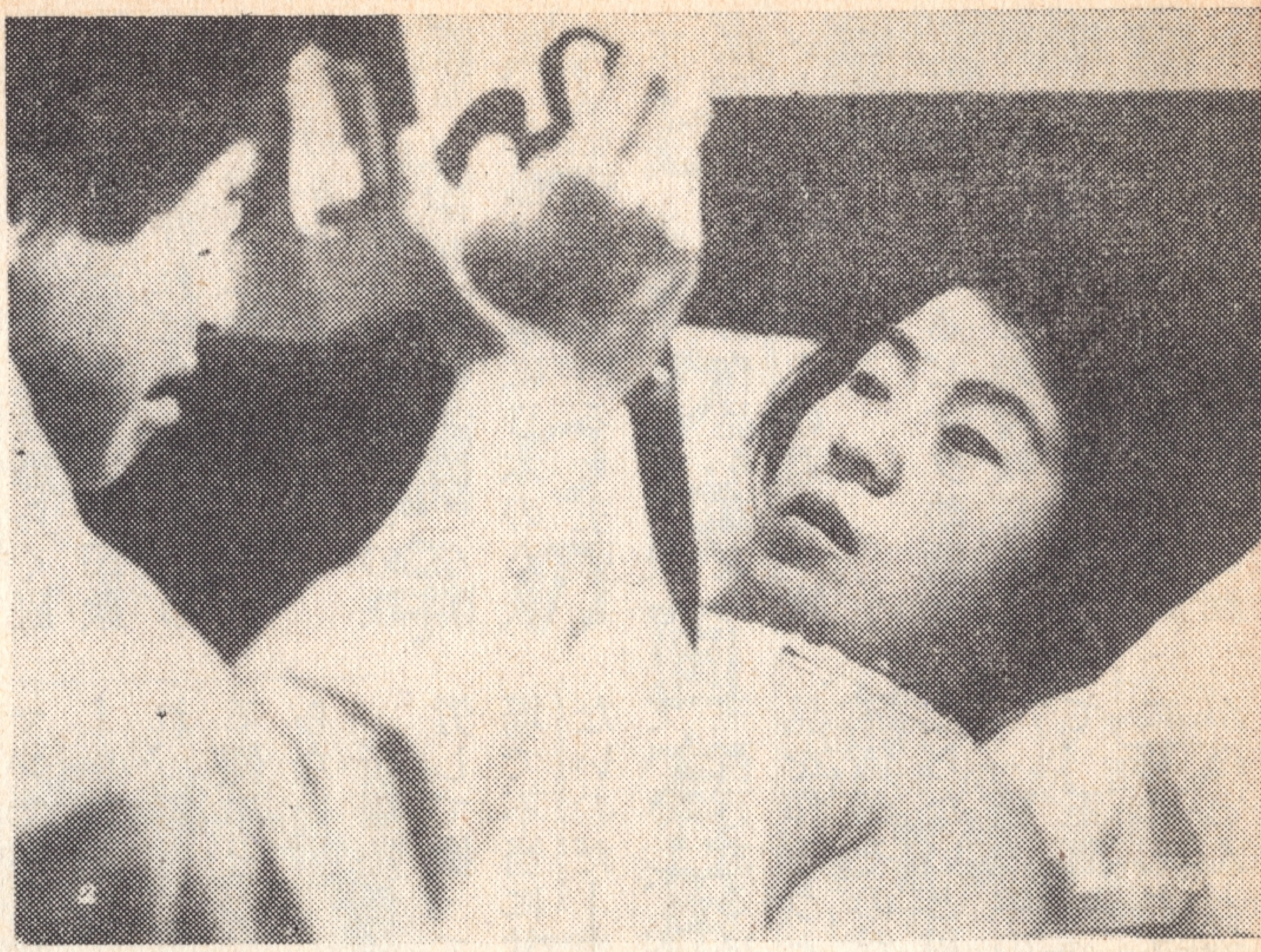
しかし、「壁の中——」からは、残念ながら私は何をも感じることなく、実に寒々とした思いで映画館を出た。

私はピンク映画といわれる作品群の中での「壁の中—」を論じているのではない。「壁の中——」はピンク映画の中では出色の秀作であったという意見も聞く。然しそれが監督若松孝二にとって一体どれ程の価値があるものなのか？

若松氏自身もそれほど自からを甘やかしてはいるまい。

「壁の中——」は娯楽作品としては楽しい作品ではなかった、だから当然それ以上の＜理念＞を目ざした作品として批判の対象にならざるをえないだろうと思う。

つまり、ベルイマンもレネも若松孝二も、ここでは同列に並べて比較されなければならないのだ。そこを誤解してほしくない。私もかつてテレビ演出家として実に数多くの愚作を作って来た。そして現在でも舞台演出家として数多くの失敗をしている。つまりまるで＜舞台ではない＞失敗作を幾つか経験している。製作条件がどうあれ、その演出を自分の意志で引き受けた以上、失敗の責任は演出家にあると思うし、幼い作品に仕上げた場合、それは引受けた演出家が全責任を負うべきものだと考える。



ベルリン映画祭に参加して話題になった「壁の中の秘事」

私は「壁の中——」を明らかに意図不明（という結果になってしまった）な未成完作品だと思う。それは黒木和雄監督の「飛べない沈黙」（私は大変この作品を買っている）の難解さ（と人はいう）などと比較にならない性質のものなのだと思うのだ。

先日、東京12チャンネルの討論番組「異議あり！」（私はこの番組の素人司会を担当している）に、「ピンク映画有用論」という問題提起をひっさげて大蔵映画社長大蔵貢氏が出演された。なかなか面白い討論で、この討論を通して私は大蔵さんという方が心から好きになってしまったのだが、このラストの方で、たまたま若松氏の「壁の中—」を引用して「映画になっていない」という意味のことをしゃべってしまった。

放送時間が迫っていてあせってもいたし十分にそのところの意が表現出来なかったので極めて誤解を招き易い言葉になってしまったが、真意は以上のようなことだ。松若氏や若松プロの方々に迷惑がかかったとすれば、この紙面をお借りして深謝しておきたい。

話をもどすが、私はこの原稿を書いていて再び若松孝二氏に激しい興味を感じはじめている。テレビの草壁氏との討論を見て感じた＜自信＞と＜話し下手＞、そして＜善人らしさ＞言葉をかえればダンプカーのような人柄に大変興味を覚える。

直感みたいなものだからアテにはならないが、この監督は劇映画よりもヤコペッティーのようなドキュメント作家なのではないかと感じた。ドキュメントなら観念が走りすぎることもあるまい。ひょっとするととんでもない大ドキュメント監督になる人ではないか——と、いまそう考えて

いる。
　編集部の希望で勝手なことを書いた。私は「壁の中―」以外のいわゆるピンク映画を実は一本も見ていない。若松氏の自信のある次回作を、何とか見逃さずに見ようと思う。

私はあなたのために失恋の歌をうたう――

若松孝二監督から岡本愛彦氏へ

前略
　お手紙、拝見。しかし、どうも手紙をお書きになったあなたの真意が判りにくいのです。
　あなたが、そのテレビ番組の司会者であり、私の「壁の――」のことを、「あれは、映画じゃない」というのを、私は仕事仲間と麻雀をやりながら聞いたのです。
　――そう、それまではどう見ても聞いても、しようのない論旨の応酬で討論にもなっていず、私は麻雀に熱中し、大勝していました。しかし、最後のあなたの発言があった時、私はラスト親で白板、緑発を暗刻で持ち、紅中をつもって来ていたのです。私は一瞬あなたの声に耳をかし、紅中をつも切りし、あわてて、他のパイと捨てかえました。そして、「あなたと二人で来た丘。港が見える丘……」という古い歌謡曲が、口から洩れ出してしまいました。
　他の仲間三人は私のしんみりした声に聞き入り、私が大三元をやっているということに気づいてしまいました。ついに私は親の役満を上がることが出来なかったのです。
　あなたが、文中で「若松プロの皆さんが迷惑した――」といってあやまっていらっしゃいますが、当然のように私はそういう迷惑を受けました。大損害です。
　しかし、考えてみれば、私もはしたなかった。というのは私は、岡本さんを作家だと思っていたし、愛していたために、そういう損害をこうむったのですね。その時の古い歌謡曲も、考えてみれば、失恋の歌であり、岡本という作家が、もはや私の目前から消え去った想いを、あなたのための葬送曲のつもりで口走ったのでしょう。――そんな私の心の中のナイーブな気持をあなたに伝えてくれた人があったとは！
　岡本さん、あなたは下手糞だが、立派な司会者です。何も小川宏の真似をして、番組のあれこれに気を使わなくとも、無事に司会屋を続けて行けますよ。私にしてみれば「私は貝になりたい」といっていたあなたが、もはやそんな志向を表現できなくなったあなただと知らなかっただけで…惜しむらくは、の話ですよ。もっと、自信を持って下さい。

〈セクシー女優クイズ〉

●懸 賞

この女優は誰？

第7回目のクイズの問題は，宙吊りにされてリンチをうける女優です。オッパイ丸出しで，デルタ地帯に肉バン（肌色のバタフライ）を貼りつけてハッスル。日活作品で監督は鈴木清順。この女優いまも鉄火場の刺青女で活躍，「悦楽」にも出演したことがあり，テレビにも出ています。さておわかりでしょうか。

●正解者10名に内田高子の「女が爪を切る時」のレコードを贈呈します。答えはハガキに住所，氏名，年令，職業を明記のうえ，東京都中央区銀座西8－10高速道路ビル地下101号室 現代工房「成人映画」編集部あて。締切は11月30日まで。発表は賞品をもってかえます。

♥シネマY談・あんなハナシ こんなハナシ

●…国電中央線の高円寺南口にあるバーのSはなかなかのピンクサービスで評判。ホステスが六、七人いて、彼女に五百円のチップをそっと渡すと、ニッコリウインクして発射サービスもやってくれる。

☆

●…池袋は西武デパートの向かい側にあるYというバー。あまり大きい方じゃないが、ホステスが十五、六人いてコークハイなどをふるまうと、口紅も鮮やかにディープキッスのサービスをしてくれる。もちろんおサワリもOK。少しあかるいのが難点だが、相手をみるにはちょうどいい。

☆

●…おタッチサービスの濃厚な奴をおのぞみのご仁なら、ちょっと不便だけど総武線小岩駅南口ガード際にある「クラブ桃源」に行ってみるといいね。〝長い時間遊んでもらうのがうちの店のモットーです〟とホステスもガブ飲みはしない。大半は土地っ子で、それだけにラスト・ダンスの後に期待がもてるんだなア。

☆

●…北海道は帯広駅前から北の方にズラリと賑やかな一帯がある。北海道美人がいる「白鳥」は、みんな女優の名前がついて「あーら、よーこそ、こちら山本富士子さんに若尾文子さん…」なんてのは気分がよい。岩下志麻さんと温泉にしけこみ、なんておつなもの。アナ場はバーのホステス。「今夜どう?」と誘えば、一時間五〇〇円でOK。

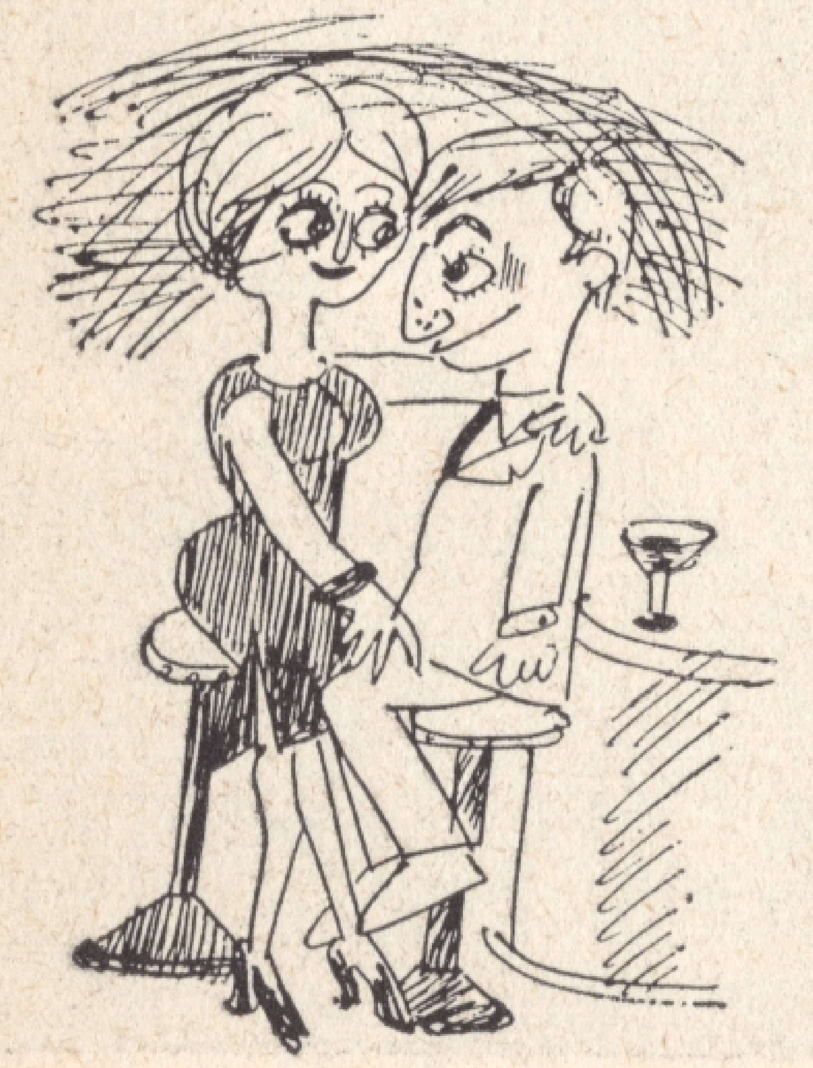
☆

●…東北本線と上信越線。国電の京浜東北線の終点と、埼玉県でも重要な岐点となっているのが大宮市。大宮銀座商店街の裏は、飲み屋や旅館があるが、その辻々に立つオンナは大宮名物。その気でゆっくり近づけばニッコリ笑って寄ってくる。「いくら?」「今夜はもう終わりだから二枚で泊まりよ」しかし、終電車までにハントしないと〝乗り遅れる?〟からご用心。

☆

●…名古屋駅の新幹線ホームのゴチャゴチャした一帯をブラブラ歩いていると「にいちゃん、いっちょうやらんか?」とオバさんが寄ってくる。シロウトなら千円、通になると五〇〇円でOK。ベニヤばりの長屋でチョイトとというわけだが、ガメツイからご用心。ジカに取引したい方は、広小路通り、江川通りにゆけば、二、三千円から、泊りは七、八千円見当。場所により値段もさまざまである。

●…目黒は洋裁学生地帯
彼女たちをハントするにはボーリング場がいい。喫茶店「目黒東宝」「白砂」「ボンソワール」「東宝パーラー」。夜の方は権之助坂を下りた「目黒新橋」の小料理屋の軒並み。三、四千円が相場とか。



誌上リバイバル

セクシー劇場

いまや舞台に専念している山本富士子だがこれは彼女がもっとも美しさと華やかさを映画に示していたころの「女経」の一場面。この作品、三人の監督のオムニバス映画で、山本と船越英二のこのシーンは市川崑監督が手がけた。一緒に入浴し妖しい山本のセクシーさを湯気の如くたちのぼらせた。彼女がまだ結婚前で、典型的日本の女の美しさを維持した魅力があった。「オヤ？　夏の蚊に食われた跡がまだ残ってる」と船越が見ているなんていう図じゃありません。

異色のピンクメロ演技派 目指す君和田たみえ

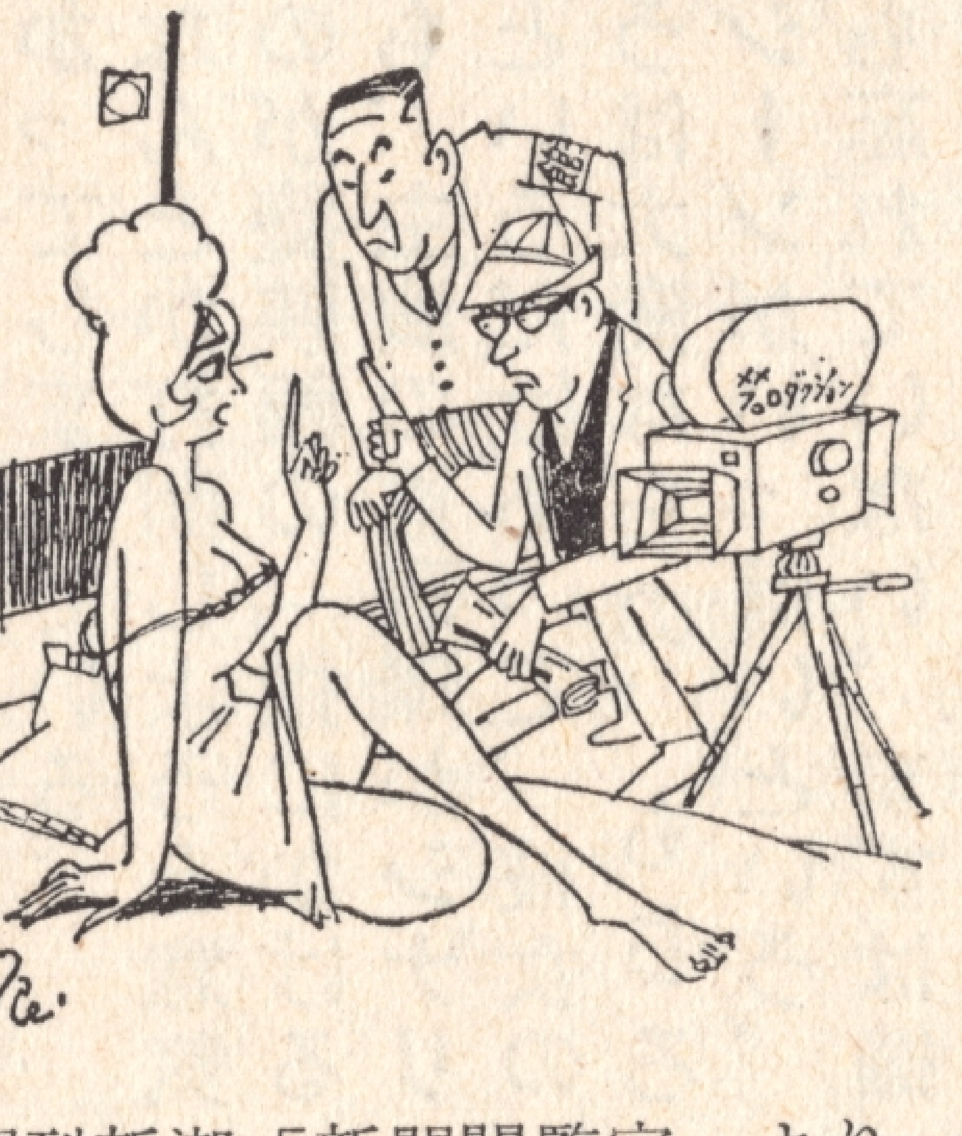
国映が台湾と合作する「母ありて命ある日」が11月中旬クランクインする。監督は湯浅浪男 主演が君和田たみえ、飛鳥公子、津崎公平、君和田が21才から47才までの娘と母の女の一生を演じ、演技派を問うそうだが、ピンク映画ではじめての合作映画。

君和田が従軍看護婦となり台湾にわたり現地で日本人インターンと恋仲になる。やがて結婚、娘が生まれ、終戦で内地に引揚げ、それから親娘の別離と悲劇が展開するという母もの。ロケは日本、台湾、沖縄と飛び、製作費も一千万円。異色のピンクメロになりそうだ。この立役に起用された君和田たみえは歌手。テレビに出演したことがあるが、映画の主役ははじめて。

ベッドにはいればみな同じ ＝「ピンク映画の芸術性」

「週刊新潮」10月15日号に掲っている「新聞閲覧室」にピンク映画の復興会議というのが紹介されている。徳島新聞九月二十一日の抜粋だがなかなか興味ある記事なので紹介すると…。

〔徳島新聞〕〃ピンク映画〃に関する独立映画の製作者業者ら約五十人が鳴門のヘルスセンターに集まって、「近畿、中国、四国独立映画懇談会」を開いたが、館主側の意見は、「五社の作品に独立映画以上のあくどいものがあり、大手をふって通っている。われわれ弱小業者、弱小館に強い圧力が加えられているような気がする」（徳島両国館）「ベッドに上がれば、することは同じ、どういう状態でベッドの上に上がるかということにポイントがある。むき出しにではなくふんわりした色気、われわれが見てよかったなというものがなければ」（岡山、木下）といった具合。これに対して製作者側から渡辺護監督が、「ベットシーンも、あの手この手は使っているが、どうもマンネリズムになる傾向がある。ドラマチックな部分にあまり力を入れなかったので、今後はお話自体がキチンとしているものを作りたい。五社では規制されてできないことを、こっちは意欲的に取りあげることができるので、その長所を生かしてゆくと発言。谷口朱里さんは女優の立場から「わたしたちは映画を作るためにはいった。ハダカになり、腰をくねらせたり、うめき声を出すだけならストリッパーで十分でしょう。みんな一作一作真剣に作ろうとしているし、わたしたちの仕事に理解を持ってほしい」。この懇談会では、ここで、よりよいものを作って世間の信用を回復しよう、と確認し合った。



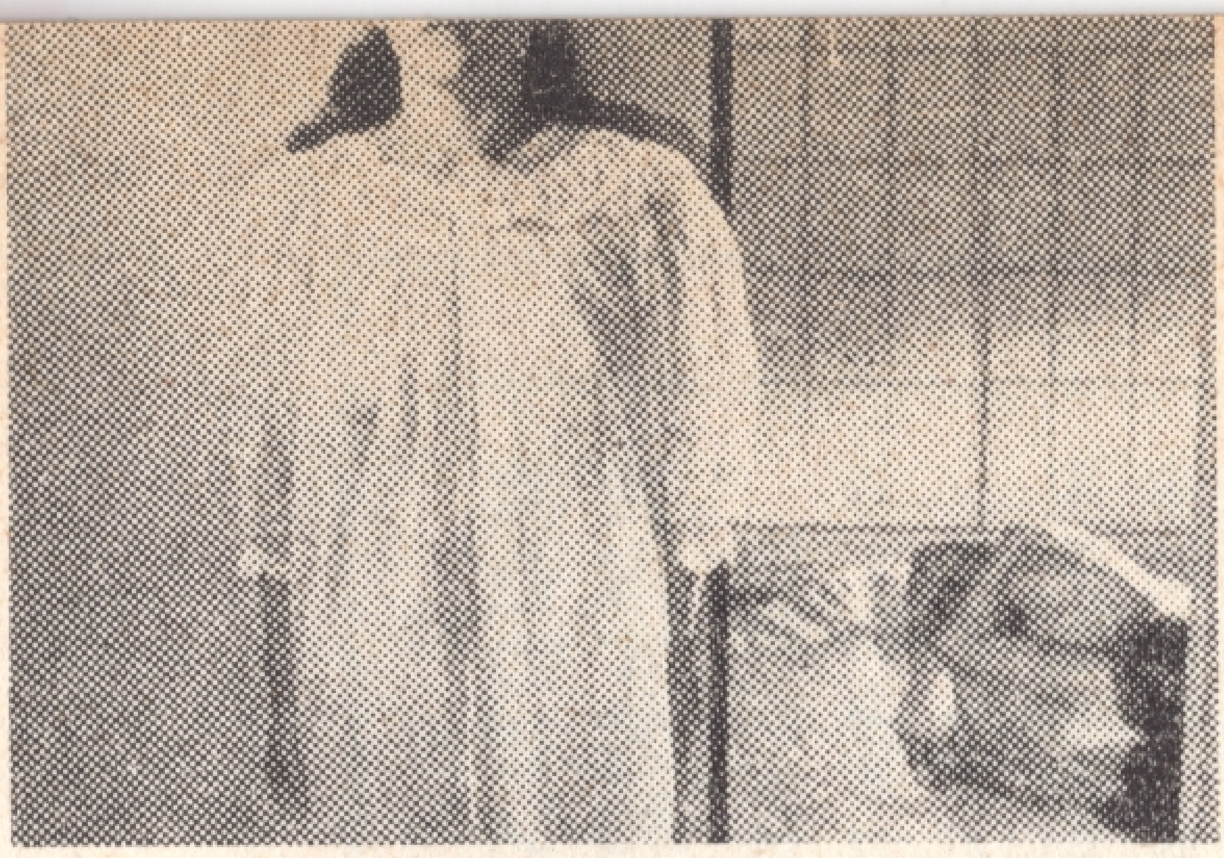
週刊新潮「新聞閲覧室」より

男女の青春像を描く 「赤い記憶」が撮影開始

青年群像のプロデューサー大井由次氏がこんど第一回監督として「赤い記憶」を撮影中。浅間山をバックに若い男女の青春像を美しく描こうというもの。「話そのものはドラマチックではないが、絵（映像）にしたときにボクの意図が表現されるでしょう」となかなか意欲的。初の監督作品として乞うご期待というところ。

交通事故でアタマがよくなった(?)松井康子

松井康子が先月タクシーに乗っていて追突され頭部をうって入院した。その後経過もよく退院したが、脳波でも異常は認められず、逆に「アタマよくなったんじゃないか」と冷やかされている。



香取環が自作・自演で大ハッスル

■ロケ・ルポ■

ベッドシーンがいっぱいのSEX喜劇

＝指にかける女＝

お色気喜劇に取り組む香取環と工藤那美（左）

ピンク映画界も、ただ女優を脱がしているというだけの、完全なマンネリの壁にぶつかってしまっている。

それを、なんとか打開しようと意気込んでいるのが葵映画の「指にかける女」。しかも、主演の香取環がシナリオを書いたというだけあって、彼女のはり切りようは大変なもの。もちろん、ベッドシーンがいっぱいという、大サービスも忘れていない。まずは撮影快調の下田ロケだよりから――。

期待できるSEX喜劇

ピンク映画といえば、ベッド・シーンと殺しのドラマ作りがほとんどというなかにあって、セックス喜劇をとりあげたのが葵映画製作・配給の「指にかける女」（監督西原儀一）。

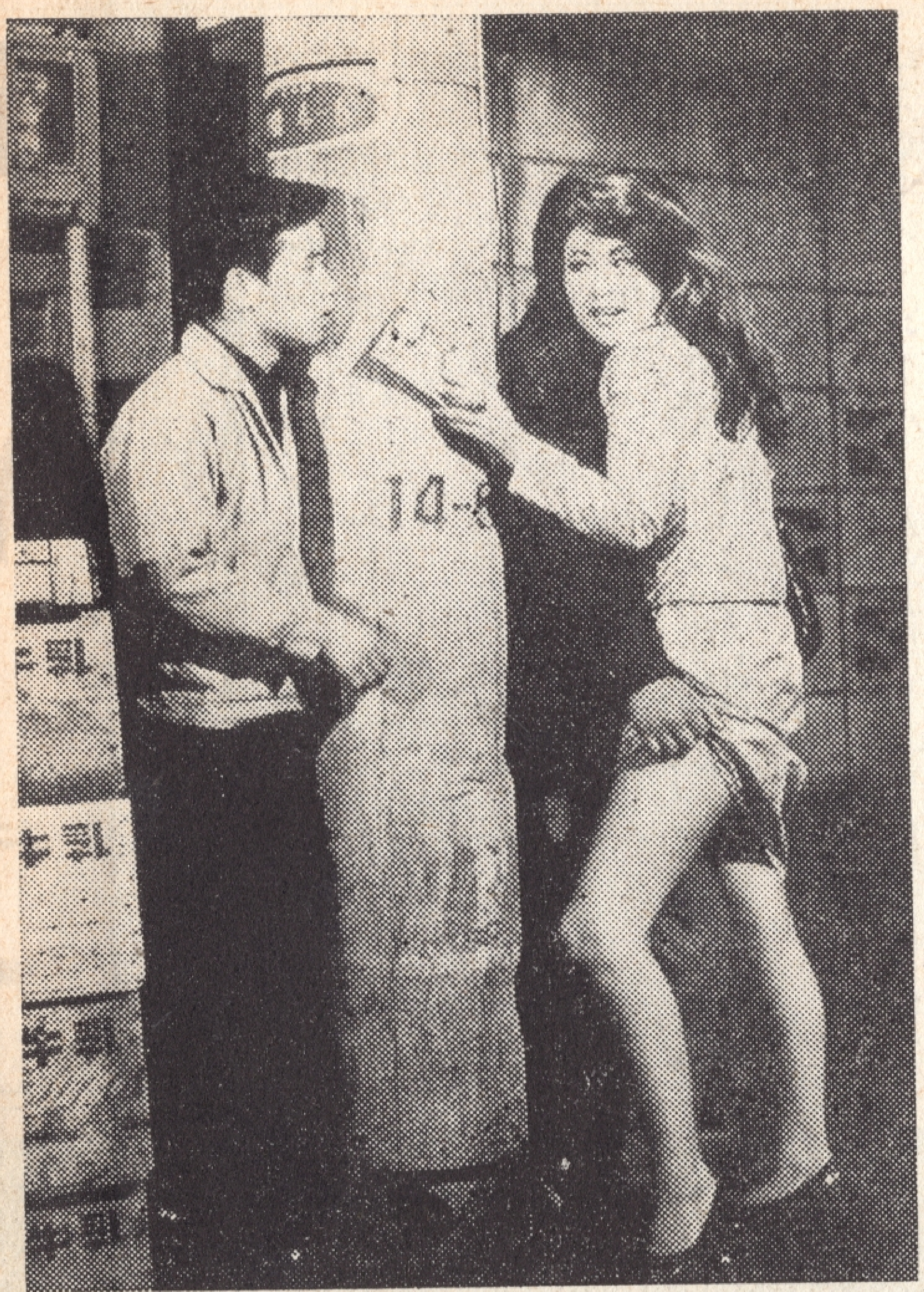
それはこういった意欲的な

セックス喜劇をよろこばない製作者側の責任もあるが、もっと明るく楽しい作品がどしどし作られてもいいはず。その点「指にかける女」は最近のこうしたマンネリズムから脱出しようとする試みは、大いに買わねばなるまい。

香取環は肉体を武器にスリの女親分

この物語は洋子（香取環）と安夫（巻映二）はるみ（工藤那美）と元吉（鶴岡八郎）の二組のアベックスリがいる。洋子は、女の武器を最大限に発揮して稼ぐが、はるみは〝芸〟が未熟でヘマばかりやっている。

そのたび親分である洋子に助けられてばかりいる。きょうも座布団の上に投げ出されていた札入れや、現金を囲んで四人は選り分けていた。しかし、最後には逃げる途中、はるみが反対方向から来た列車にひかれ死んでしまう……といった話。撮影は、薄いネグリジエを着た香取が片膝を立てて、工藤那美らに命令するシーンの最中。ネグリジエからはみ出た太ももをチラチラさせて、意勢のいいタンカがつぎからつぎと出てきて、みていても気持がいい。地でいける香取は水を得た魚のようにいきいきしている。



香取環のチラリズム

悩厚なベッドシーンもニュースタイル

西原監督と香取環のコンビはこんどで四本目とあってピッタリ息が合って撮影は快調。

しかもこの作品は、香取がはじめて脚本を書いたというものだ。ピンク映画の女優が、シナリオを書いたのは珍しい。

「あなたが本当に書いたの」と聞いたら「あら、私書いたりするの好きなのよ。葵映画の題名やタイトルはほとんど私が考えたのよ」といかにも自慢ガオである。

「でも、この作品書くのに三日も徹夜したのよ。バテちゃった。マンガの〝アトミックのオボン〟みたいなものを狙ったんだけど。自信あると思うんだ…」と瞳を光らせた。

「今回はいままでの作品のカラをやぶって、セックス喜劇にしようと思う。コミカルな味を出せるキャラクターがいないので苦労しましたが、香取クンがいたので彼女がどこまで味を引き出すか、やってみないことには…。しかし、いままでのものより、ベッドシーンがたくさんあり、たのしいですよ」とサービス満点の西原監督。ベッドシーンふんだんのセクシーコメディという異色作に期待したいところ。

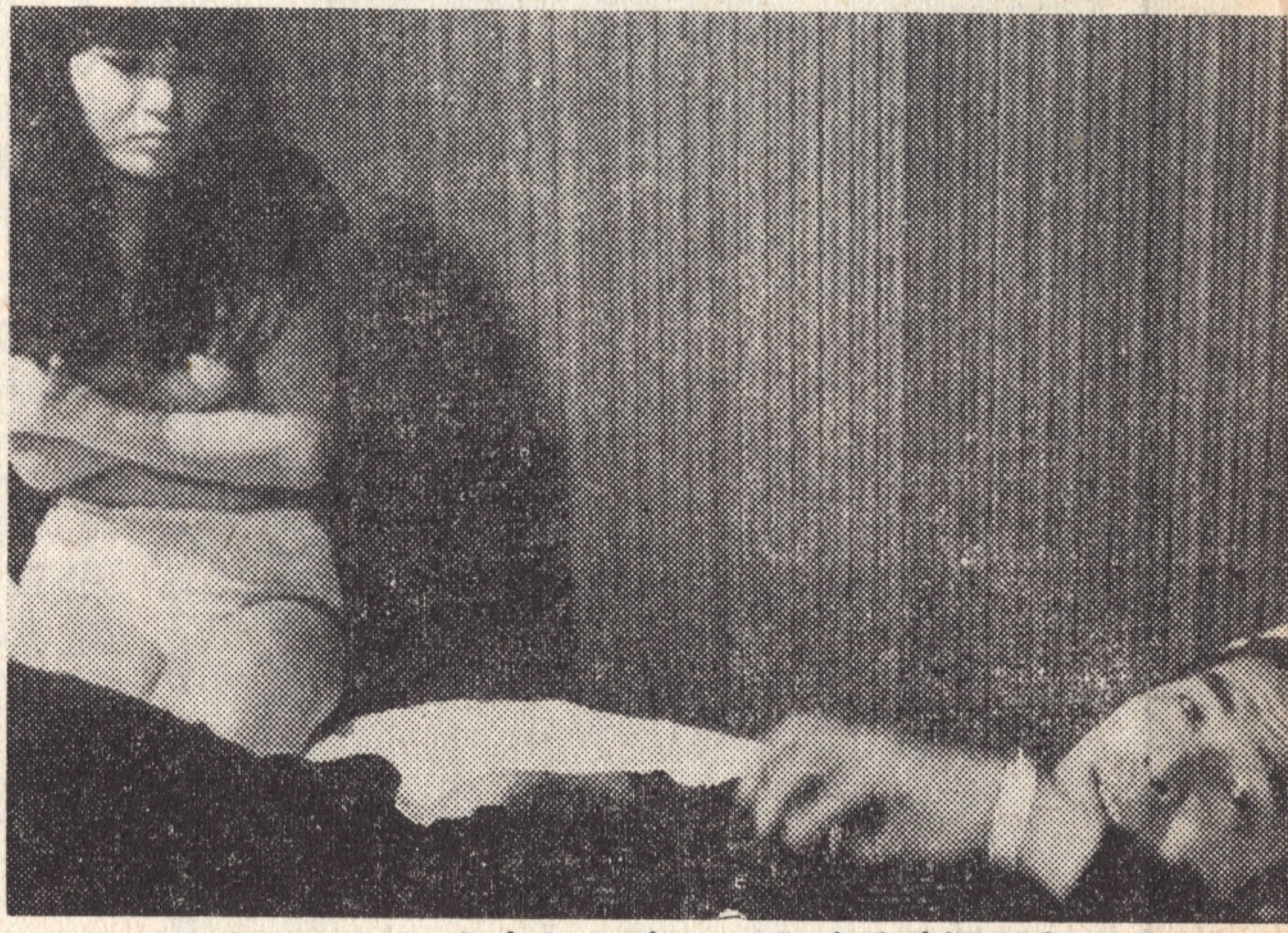
●ロケルポ

「女高生ジャングル」（関東ムービー）

ベッド・シーンに冴えを見せる渡辺監督

「女高生ジャングル」の撮影が、四谷の旅館の一室であるというので、取材に出かけた女優が新人の小国リカ（この一作以後は綾瀬マキと改名）のデビュー作で、監督が渡辺護と梅沢薫。前に「女子大生の抵抗」という作品をみたが、なんで女子大生が抵抗したのかさっぱり描き切れていなかったが、人妻（谷口朱里）と大学生（野上正義）との情事進展シーンは克明に描かれ、カメラワークも見事なものであった。この監督はベッド・シーンを撮ったら、ちょっと他に追従をゆるさないシャープな手腕をもっている。

ところで「ジャングル」は、横浜をバックに三人の高校生グループが大人達に反抗して外国に行こうとするがはかなく夢が消えてしまうという話で、起用された小国が温泉マークで処女を失なうところ。ボーイフレンドに裸をみせて、いざベッドに…というシーンであった。相手の男優がパンツを脱ぎ、処女の小国に迫ってゆくシーンだが、かの男優クンは、彼女の前でストレートに脱ぐのは恥かしくてできないとしきりにボヤク。「彼女に対しても失礼だし、ボク童貞だから……」と渋る。さて妙案がないものかとスタッフがチエをしぼったところ、カレのデルタ地帯にタオルのバタフライを密着させたらいかがなりや…ということになった。一同大いに失笑せるも、「まあやってみよう」と梅沢監督氏がタオルを折りたたんでバンソウコウで貼りつけた。なんとも異色版である。「ああ、オレこんなことまでやらされるなんて、愛する女房にみせたいくらいのもんだ」と梅沢監督が情けないカオをした。ムリからぬ情景だ。



ベッド・シーンを自から演じてみせる渡辺監督

男優がバタフライをつけて演技したなんて、近年この方きいたことがない。ピンク映画撮影裏話の一ページを飾るにふさわしい。いざ撮影となったが、ベッドに座り、カレとあい対する小国がパンツをおろすところでゲラゲラ、男がバタフライの珍なる姿に笑わない方がおかしい。

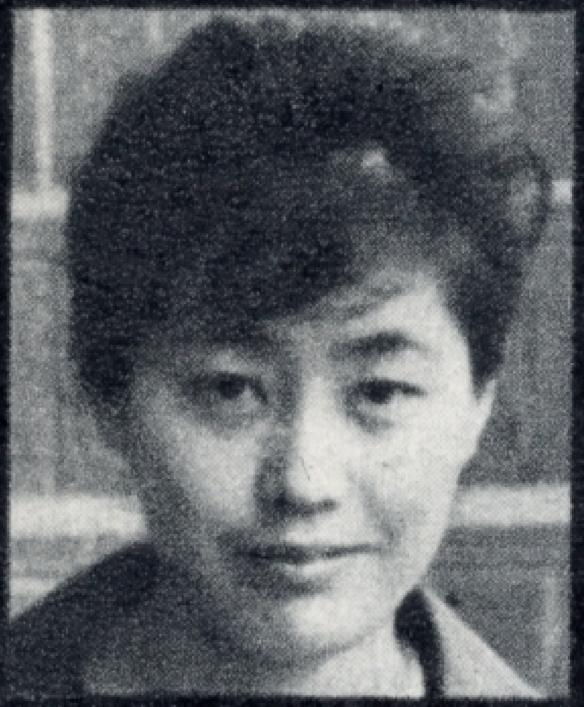
カレはもはや、バタフライで女性転換となったのか、演技に〝リキ〟がない。監督からさんざん油をしぼられてベッドシーンをやったのであった。

（次頁グラビアへつづく）

女優／綾瀬マキ

女優 綾瀬マキ

文 川島のぶ子
カメラ 本誌特写



フラダンスできたえた 均整のとれた肉体美

ある人の紹介で、彼女は私に会いにきた。色が黒く、髪が背中まで長く、目ばかりクリクリ大きい。いままでの女優にない魅力があった。このキャラクターを見て〝これはいける〟と直感した。久しぶりに楽しくなったものだ。

はじめ小国リカという芸名で「女高生ジャングル」（関東ムービー配給・監督渡辺護）にデビューしたが、あとで、私が綾瀬マキの芸名をつけた。

フラダンスをしていたというだけあって、勘がよくて、映画ははじめてだというのに、小柄ながら均整のとれた体軀の持ち主だ。まわりの俳優を食ってしまうほどだという評判が、私の耳にもすぐきこえて来た。

雨の日曜日、心配でロケ現場をのぞいたら、意外と明るい表情で、スタッフの人たちに可愛がられていたので安心した。

彼女の持つ庶民的な明るさと奔放な中にも節度のある行動が、そうさせるのかも知れない。

渡辺監督が「久しぶりの若手だから貴重ですね。大切に育てようよ」といっていたが、同感である。

下落合のアパート付近を散歩する清水世津

〈スター訪問〉　清水世津

四畳半の独り住まい

湯浅浪男監督の「悲器」水戸ロケさきで、バーのホステス役で出演していた清水世津「あの子はこの世界では珍らしい女優らしくない素直な人だ」とホレていた。

あまりムダロもきかず、きわめて、その存在が薄い気さえしたが、かれこれ三十本近い作品に出演しているキャリアはやはり、この世界で十分認められているからだろう。

■川の流れを見て暮らす

前日にアパートに訪ねてゆくからどうや？という問い合わせをしたら「お待ちしてます」と心よき返事。やっぱり湯浅監督のいう「心根やさしきメノコ」らしい。

さて彼女の住いする西武新宿線の下落合駅にカメラをぶらさげて降りた。駅の売店から電話すると「いますぐ迎えに行きますから、いて下さい」というので、駅の前のベンチに腰かけて待った。秋の午後三時の陽が、西にかたむき、やわらかい陽ざし。ここで落ち合う下落合い…などとシャレてみたりする。ややあって半ソデセーターにスラックスの彼女が駆けてきた。「すぐ近くなんです。歩いて一分……」彼女にともなわれて橋を渡り、そのたもとのすぐ三軒目が彼女のアパートである。小さな階段をのぼると「ここなの、狭まいのよ」とちょっぴり照れながら、自分の部屋の扉をあけた。

女ひとりの部屋にはじめて入る気持ちってのはとても新鮮なものである。部屋は四畳半。窓のすぐ下に川が流れている。〃なにをくよくよ川端柳、川の流れをみてくらす〃の坂本竜馬の歌じゃないが、毎日彼女はクヨクヨしないで、素直なのも川の流れをみて暮しているからなのだろうか。

ここに住んでもう丸一年。実家が藤沢にあるものの、通うのが不便というので、四畳半のアパートひとり住いとなったのだそうだ。

■孤独を愛する女らしさ

彼女はさきの「悲器」で湯浅監督に認められ「1/2の情事」「柵の中の女宴」の二本に出演したし、一息ついたばかりのところだ。

「仕事のないとき部屋でなにしてる？」

「なんにもしません。強いていうなら、レコード聞くか本読むくらいかしら」

「寂しくないの、ひとりでいて……」

「わたしってね、孤独が好きなの。それでなくても日ごろ仕事で対人関係で疲れるでしょ。せめて自分の部屋に帰ったときぐらい、誰からも束縛されず、寝たいときに寝て、起きたいとき

レコード聴くのが愉しみという清水世津さん

起き、好きなことを考えるのも精神的に肉体的にいいんじゃないのかしら。自分の部屋は孤独なものよ、本来……」

なかなかいいことをいう。現代は孤独に耐えられない連中が多い。自分を見つめる時間を持たず、考える時間もない。だからアイデアもなければ、美しさも前進もない。その点彼女は女らしく、孤独を愛していた。

■自炊生活もまた愉し

周囲といってもグルーっと見渡せば狭まい部屋だから、調度品はすぐわかる。

小さい台所、テーブル、電蓄、三面鏡、洋服タンス、テレビ、椅子、食器棚やら人形ケース、観葉植物が好きとみえて四鉢ほど。きわめて素質な生活だ。

「食事なんかどうしてんの」

「ちゃんと自分で作って食べますわ」「味けないでしょ、ひとりじゃ」他人がメシを食う状況なんて聞くのはヤボだがやはりピンク女優の食生活は興味のある点だ。衣食のあとにくるものはセックスだけど、その方はあとでふれるとしてまず〃食〃。

「いろんなもの作って食べます。誰もいなくたって、テレビをみながら、結構楽しいわよ」

そういえば、夫婦だって、ロクに物もいわないでモクモクテレビをみて食事を済ませる夫婦だってザラにいるのだ。誰にも侵害されず、食生活の自由を味わっている清水世津、健康で消化がいい食事をとっていることになろう。

得意な料理はなにかしら?

■男友達とは浅い仲？

話をしている合間にさかんに電話がかかってくる。小一時間のうちに五、六回も電話がきた。

「デイトの約束？」

「そうじゃないの、アフレコの打ち合せよ」

「ボーイフレンドいないわけないでしょう？」

「いますわ、でも深い仲なんかじゃないんですよ。」

「じゃどんな仲？」

「藤沢にいたときのお友だちね。映画みるか、君の映画はあれこれだったーと批判してくれる人たちよ」

長い髪をくるくる指さきで回して、チヨッピリ照れる。

あまりはでな顔だちではないが、この人はつき合えばつき合うほど女らしさ、可愛いさが出てくる。

女優なんかやめて、はやくよき妻になった方がふさわしいのじゃあるまいかと思う。しかし、こうした女優もいまのピンク映画の中では貴重である。

まだまだ彼女のよさが発揮されていないようだが、せいぜいガンバッてほしいものである。

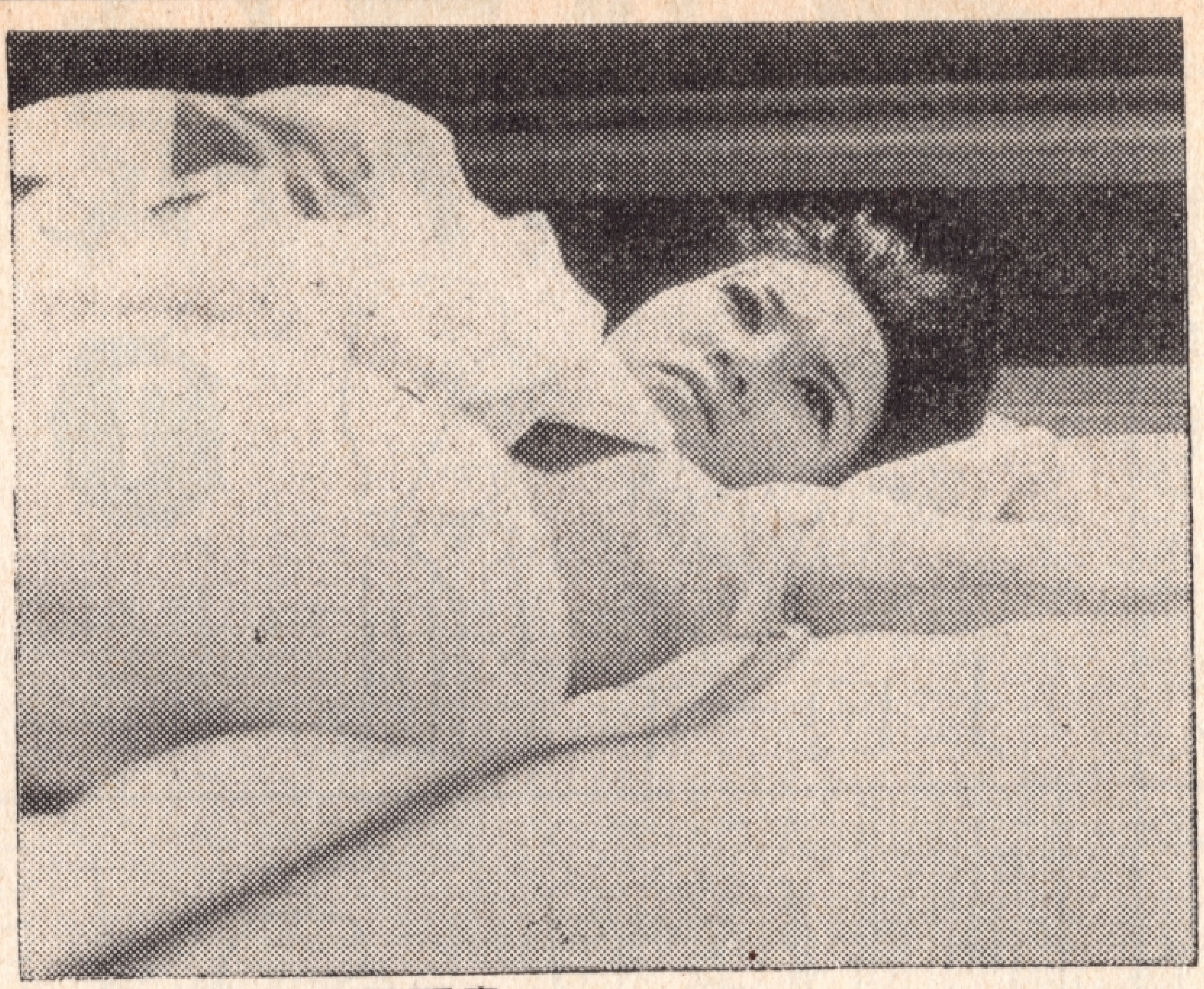
ゴージャス娘 7

上田一平

ピンク映画みたまま

■北大路欣也を悩殺するか 奈良あけみ＝アラビアンナイト

■…今月、夜の社交場でお会いした人たちといえば、ブラジルから帰って来たばかりの緑魔子に会えたことが何んといっても嬉しかった。サンバ・スタイルのアッパッパで渡辺裕介監督と熊井啓監督に囲まれウットリと洋酒をのんでいた彼女は、ほんとによかった。



「続・情事の履歴書」

その翌晩は、**谷口朱里**と渡辺護監督と道でバッタリ。意気投合して三人合い乗りで東中野の城山路子サン経営のバー〃リズ〃へ。

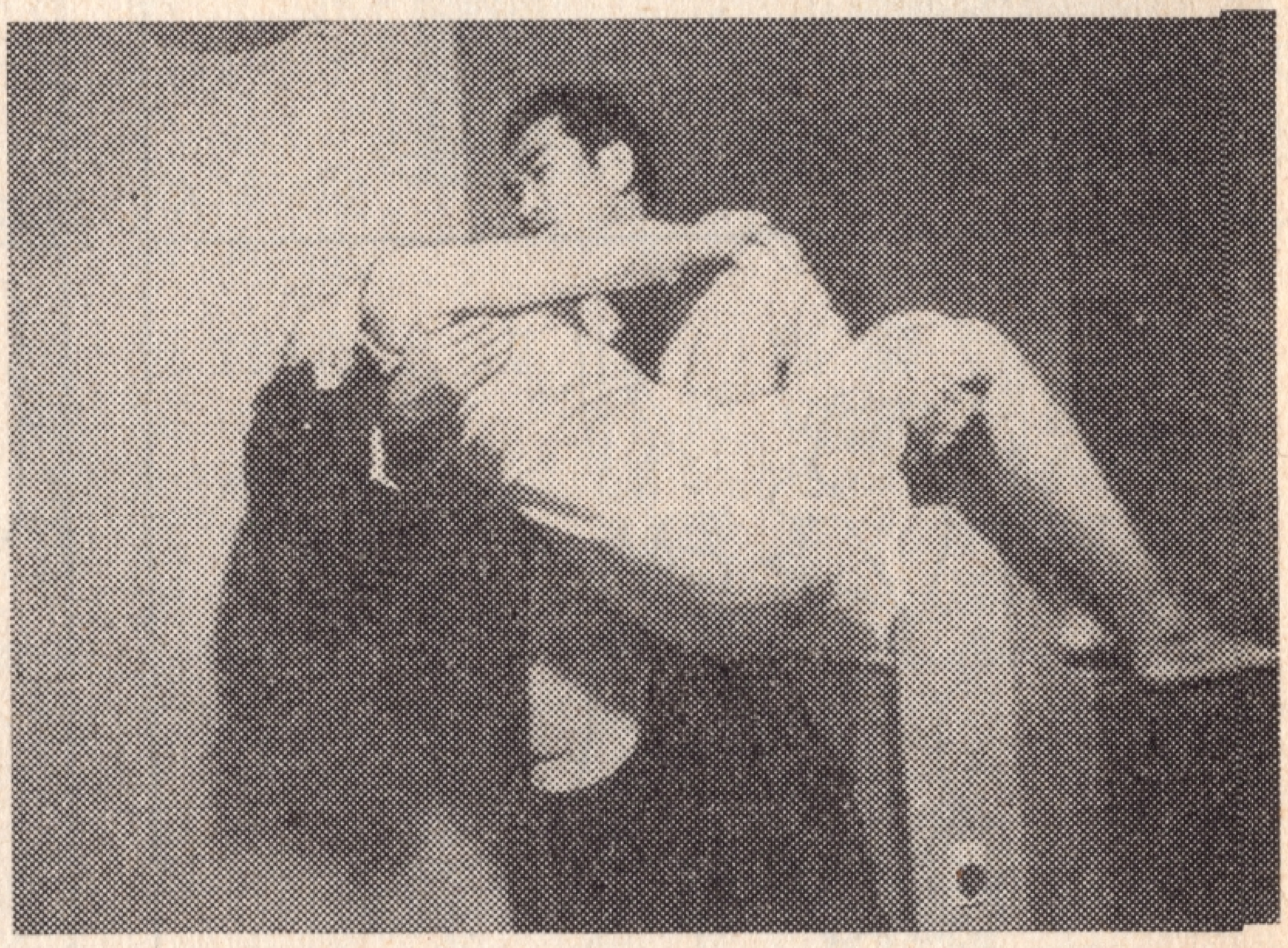
このところ、めっきりお色気を増した朱里さんは最近、なにか恋をなさっているというようなオウワサでした。あと、**奈良あけみ**さんとも夜のデイト。

彼女はこんど日生劇場の「アラビアン・ナイト」に出演するが、あのグラマラスな肉体で大いに北大路欣也のシンドバットを悩ますというワケで、「ハイハイ来月は必らず日生へまいります」と固い約束をさせられた。

■女が衣裳をとっているとき ＝戦争が終った

■…さて、このところ毎日「フランス映画祭」と「スエーデン映画祭」で大忙がし。

そのなかでイブ・モンタンとイングリット・チェーリン共演の「**戦争が終った**」のベットシーンがいとも鮮やかだった。



「裏切りの季節」

モンタンの役はスペインの亡命者として地下活動のためほとんど家に寄りつかない。たまたま帰って来たその晩、この夫婦の愛の交換はセキを切っ

たように激しく演じられる。モンタンはやさしく愛撫しながら、ブラウス、スカート、ブラジャーと徐々に彼女の衣服をとってやりながら、次第にふたりの感情が昂ぶってゆくところを実に見事に表現していた。

イングリット・チューリンは「沈黙」でマスターベーションを演じた女性だが、あの暗さとは正反対のような激情的表現で、ゆれるような乳房を惜しげもなく、愛する夫に捧げていた。

■芸術づいてしまった若松作品
＝「裏切りの季節」他

■…ピンク・チェーンは大分、新しい監督が意欲的になって来ているようで、先月紹介した「堕胎」の足立正生「裏切りの季節」の大和屋竺、「浮気虫」の山下治、「続・情事の履歴書」の向井寛、「やめてくれ」の河村治彦新藤孝衛とこの辺の監督の作品はまず、見ても一応の水準作品をみせてくれると思う。

若松プロはこのところ芸術づいて、ピンクチェーンの枠に合わせるのに一寸、苦労していたようだが、「裏切りの季節」が新宿の京王名画座でロードショウして大当り。ピンク映画でまた違う実験や冒険が出来ると言うことに自信を深めたようだ。

若松プロの新作は「情欲の黒水仙」と「白い人造美女」。私は「白い人造美女」しかみていないが阿片と麻薬とで条件反射のように動めく美女たちのオハナシ。アメリカが映画の「影なき狙撃者」のピンク版という感じだった。

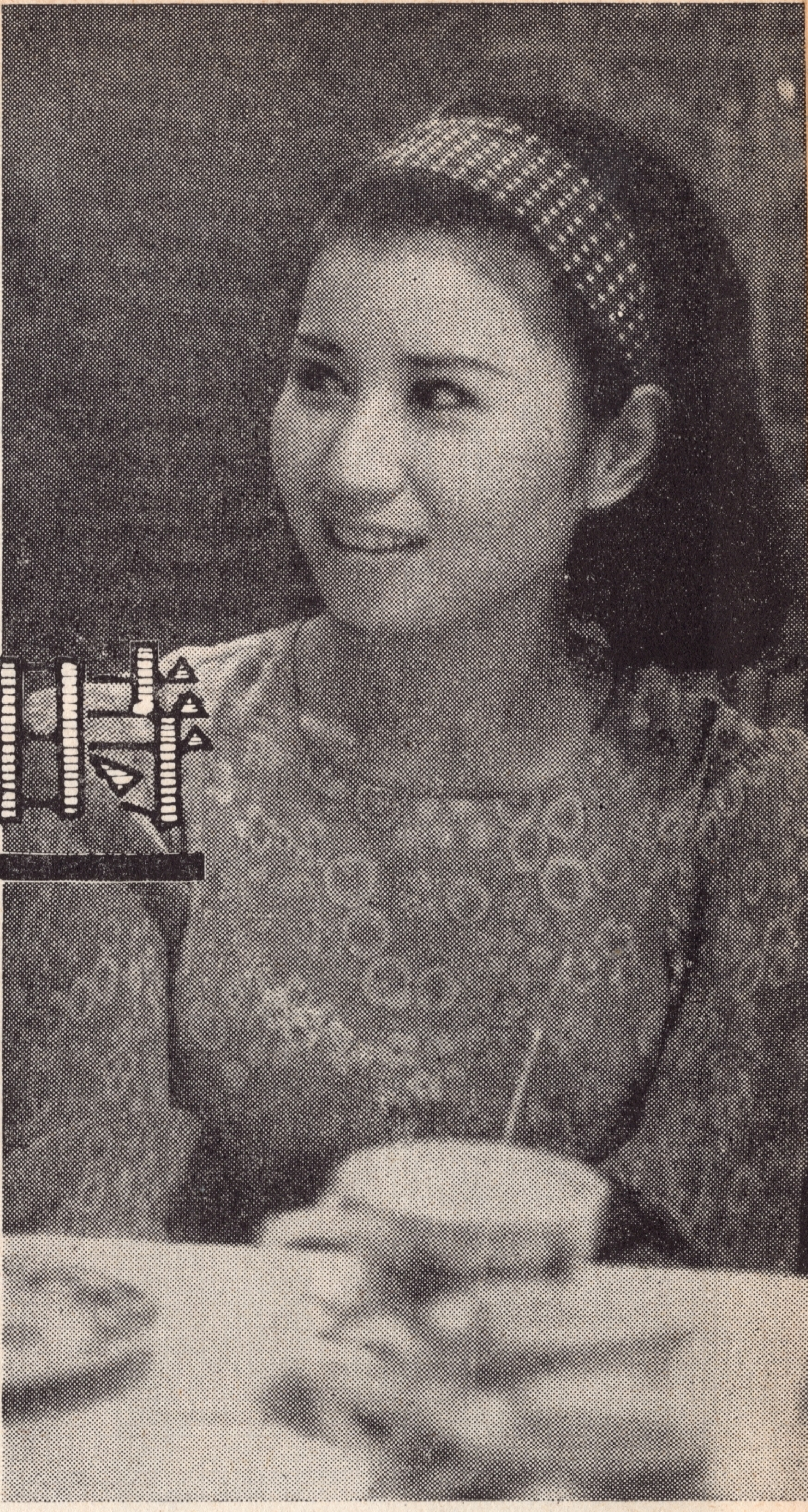
☆　☆　☆

佐藤重臣 ＜映画評論家＞

若松監督の意欲作「白い人造美女」の向井まり

をやめる時

ゲスト・内田高子



「ベッドでタバコはすわないワ」と内田高子さん

タバコよりお酒より愉しいことがある

内田 私ね、タバコをやめたのよ。きっぱり。

川島 あら？ なぜ。

内田 ノドを刺戟しないためなのよ。いま歌の方を勉強してるでしょ。いろいろ考えて決心したの。

川島 一日何本吸っていたの。

内田 一日二十本くらいね。それについでにお酒も止めちゃったのよ。

川島 じゃ楽しみないじゃない、ああほかにもっといいお楽しみあるらしいもんね。

内田 それどういう意味、イヤーあよ。あたしタバコ吸いはじめたのは映画の仕事をするようになってからよ、芝居でマネをするようになって病みつきになったわけなの。

レコードと映画の両立はむずかしい

川島 ところで最近レコード吹込んだでしょ。評判はどうなの。

内田 八月の二十日ころ「女が爪を切るとき」を発表したでしょ。そのあと九月二十日にさらに「ベッドでタバコを吸わないで」も吹きこんだばかりよ。これは映画化することに決まったけどね。

川島 タイムリーじゃないの。どこでやるわけ。

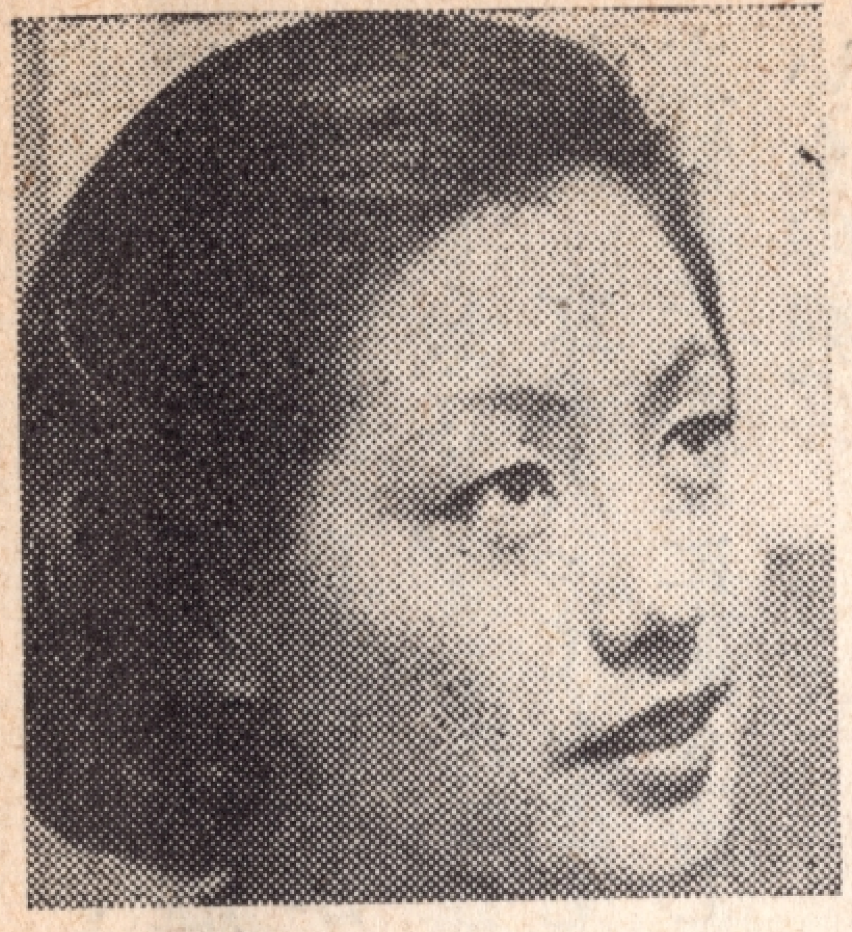
内田 正式に発表するまでいってないけど天知茂さんや内田良平さん、杉浦直樹さんたちに交渉の段階ですけどね。監督は向井寛さん。製作配給はまだ決めていませんけど一応作ってから勝負しようと思うの。もちろん私のプロデュースだけど。

川島 歌の方もいいけど、肝心の映画の方は。

連載インタビュー　第四回

■きく人／本誌　川島のぶ子

女がタバコ



ピンクスターのNO 1内田高子さんが、最近矢つぎばやにレコードを発売しました。「女が爪を切るとき」につづいて「ベッドでタバコを吸わないで」の二本。ピンク映画スターが、堂々と歌も……というのも道理もともと映画に入る前は、ネグリジエ歌手として芸能界にデビューしただけに、元のサヤにおさまったともいえるわけ。「ベッドでタバコを吸わないで」のレコード吹きこみのあと、彼女自身が禁煙をはじめた――というのはどういうことでしょうか。ベッドだけでいいのにねえ。

（川島）

内田　〃赤い情事〃〃異常な体験〃なんかが最近のものね。

川島　ことしはもう何本出たの、少ないみたいね。

内田　あまり出てないのよ。十本あるかしら、しかしこの社会って出れば出過ぎたといわれ、少ないと出てないといわれるしねえ。

川島　しかしもっと出なけあいけないんじゃない。きょ年にくらべて少ないもの。ファンがせっかくついたんだから……。雑誌でもあなたの表紙なんかにするとグッと売れ行きが違うなんてK社ではいってたわ。

抱負を語る内田高子さん（左は本誌川島）

内田　あらそうかしら。でも私、最近自分で感じてるのはなんかファィトが足りないんじゃないかな……と思うの。前は体当たりでやってたでしょ。それが歌をやってから少し変わったような気がするのよ。

川島　そうね、ちょっとパンチが足りないようね。

好きというだけで結婚はできない

内田　なんか自身でも抵抗感じていることは事実ね。歌をやっていてブランクがあったためもあるのね。いろいろ壁につき当っているといえるけど、成長する〃カベ〃ならいいと思うのよ。いまあまり仕事してないようにみえるけどいまが一番自分が充実していると思うのよ。

川島　それあそうでしょ。

内田　そういう意味じゃないわ。（この辺デリケートなニュアンスです）とにかくいままでは束縛されっぱなしだったものね。いまはいく分自由になったしね。あたしは相手によって感化され易いのね。

ひどい貧乏にも困らないし、お金持ちでもそれに順応してしまうしね。自分自身がないのかしら……。

川島　女の人ってもともと自主性がそんなにある方じゃないものね。

内田　でもそれじゃいけないと思うわね。

川島　いろんな意味でいまあなた一番幸わせそうよ。レコードを吹き込んだし、自分のペースで映画に出てるし……結婚なんか考える？

内田　それは大変なことだと思うわ。好きだから結婚しますなんてことで一緒になれないでしょ。恋人でいるうちはいいでしょうけど、夫婦になったトタンに破滅がくることだってあるしね。そういうのってこのごろ多いしね。

川島　じゃ結婚の意志はまだまだってワケね。このごろのファンはどう？

内田　いろいろきます。この前なんかアパートに果物カゴを下げてサインしてくれなんてちょいちょいくるし、電話もかかってくるのよ。怖くって。だから住所はほとんど発表してないし、一切テイチクレコドを経てやってもらってんのよ。

「今が一番幸福かもしれないワ」と内田高子さん

ビールはお酒の内にはいらないから……

川島　どう遊んでる。なんかおっとりしたみたいで貫録でたじゃない。

内田　クヨクヨ、コセコセあくせくしないでやってゆくより外ないわね。好きな歌、好きな映画を作ってゆきたいし、あわてないつもりよ。

川島　しかし、少しはスポーツかなんかやりなさいよ。この前も私と谷口朱里と桂奈美さんとボーリングやりに行って夜なかまで遊んじゃったけど、たまにはいいもんよ。

内田　秋だしスポーツでもやって一つ健康増進でも考えようかな。それに食欲の秋でもあるしね。一ぱいのんで……

川島　あらあんたお酒もやめたんじゃなかったの。

内田　まあ、ウィスキーとか強いのはダメだけど、ビールくらいはいいわよ。ノド刺戟しないから。そのうち一ぱいこう軽くやっか……。

川島　そうしましょう、そうしましょう。

　ああ、それから、あなたのロマンス説、いろいろ耳に入ってくるけど、どうなってんの。

内田　芸能界にいるといろんなことといわれたり、書かれたりするもんなのね。いまはそっとしておいてね。プライバシーを侵害されたくないのよ。

川島　あまり変な週刊誌に追いかけ回わされないでね。

クローズアップ

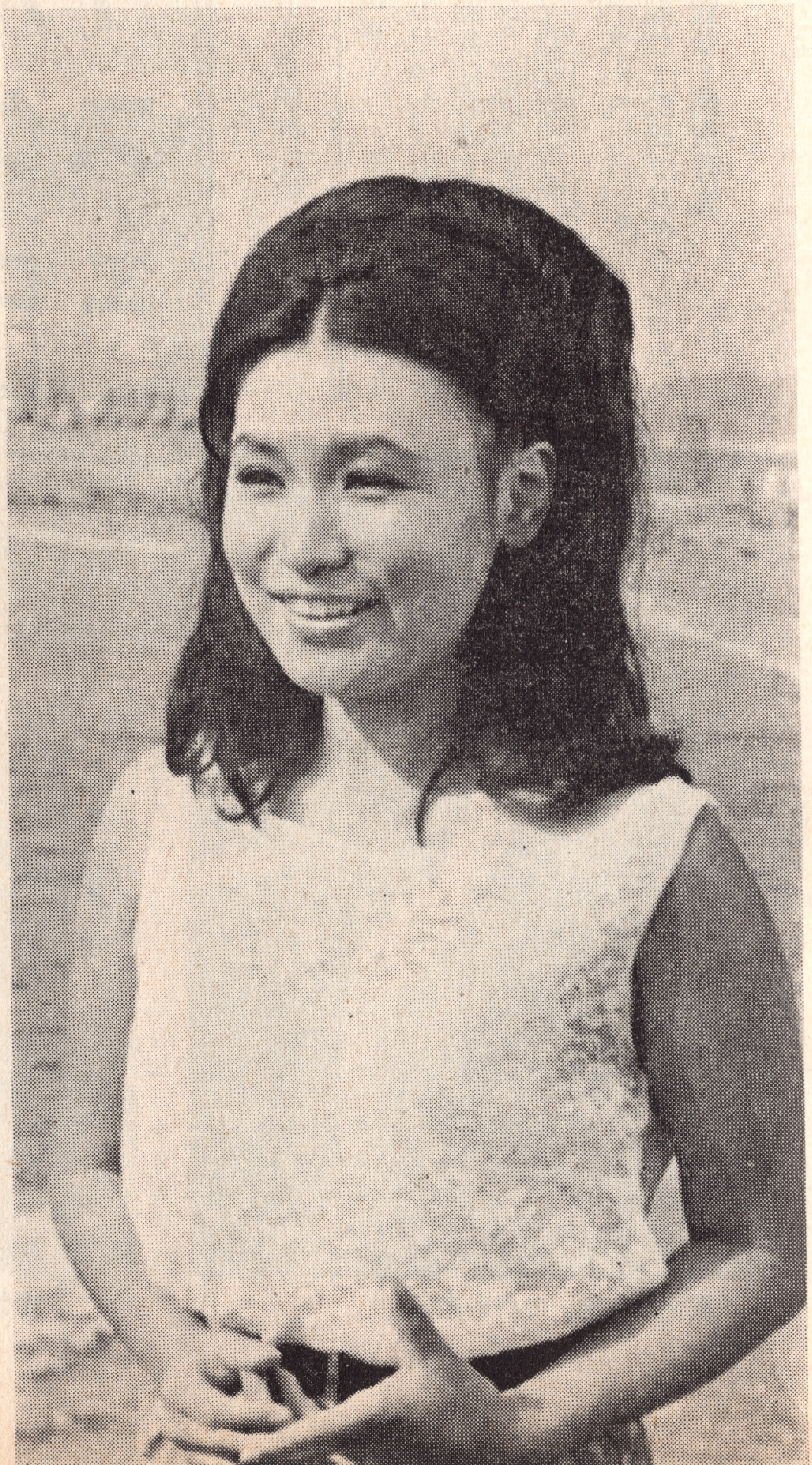
歌える女優を目指す 飛鳥公子

この夏、国映「悲器」の水戸ロケの現場ではじめて会ったとき〝この子はそうとうイカレてる子だな〟という印象が強かった。

なにしろポンポンおしゃべりが飛び出して遠慮がない。退屈がないのである。しかし一夜、宿を共にし素顔の彼女に接して、はじめの印象がくずれた。ちゃんと自分のものを持っているのだ。底抜けに開方的で明るく素直な点がいい。湯浅監督が「ピンク映画の緑魔子だ」と評したが、小柄ながら若さがはちきれんばかりの体は、家業が肉屋さんのせいだろうか。

「肉屋の娘だけど肉はあまりたべないのよ。好きなのはスパゲッティなの」イタリア的奔放さはそのせいかな？

昭和二十年十月生まれの二十二才。年より若く見える。高校卒業後、東映、テレビで仕事をしているうちに誘われて「あばずれ」でピンク映画界にデビュー。年間二十数本出演しているが仕事が楽しくてたまらないという。歌の方もなかなかのものでクラブ歌手として活躍しているが、十一月末ごろ、彼女が吹きこんだ「真赤な恋のちぎれ雲」「セブンテイ・ラブ」が東芝から発売される。ピンク映画から内田高子に次いで二人目の歌手が誕生することになる。



「悲器」では主役の香取環を上まわるハッスルぶりで湯浅監督のペースを狂わしてしまったのだそうだ。「悲器」は香取環の主演をうたっていながら、その実は飛鳥の映画みたいな印象にさえなった。まだ難点も多い女優だが、努力次第で名前の如くに飛ぶ鳥のいきおいが訪れるだろう。

（川島のぶ子）

新作紹介

今月のスクリーンエロチシズム

情事の溪谷——大蔵映画配給

●金と色欲に狂ったみにくい人間像

〝鍵開けの名人〟といわれている黒川（山本昌平）が、情婦の悠子（公敦子）ともつれあっている最中に、斎田（武藤周作）が訪ねてくる。彼は数千万円を盗んで山へ埋めたという男と獄中で知り合ったのだった。山奥へ埋めてある現金を求めて三人は出かける。途中、道で出合った土地の若いユリ（西百合）を道案内にして……。

製作＝武田プロダクション
監督＝武田有生

「異常な体験」の内田高子

「情事の渓谷」で熱演する西百合の若い魅力

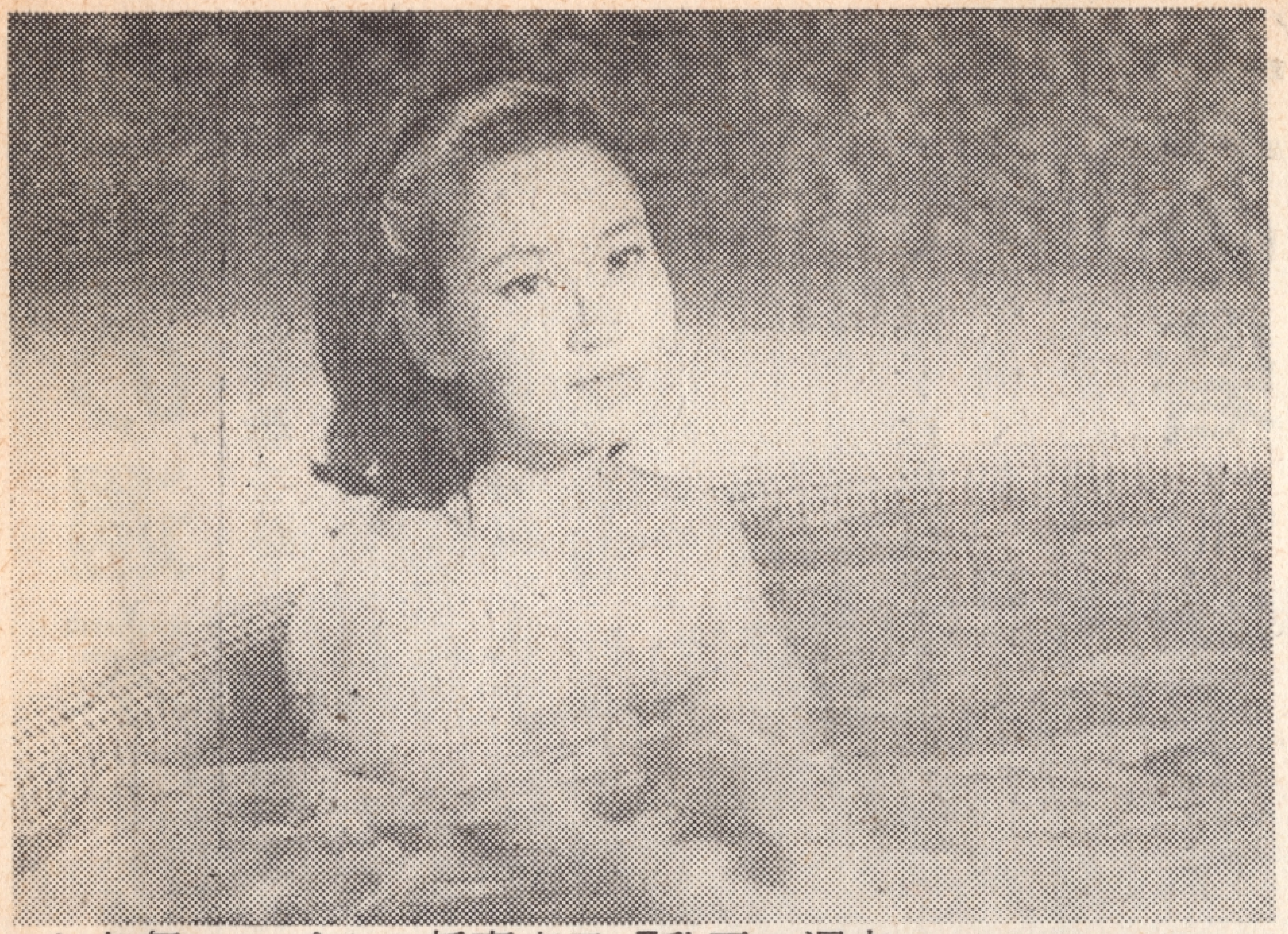
異常な体験
＝関東ムービー配給

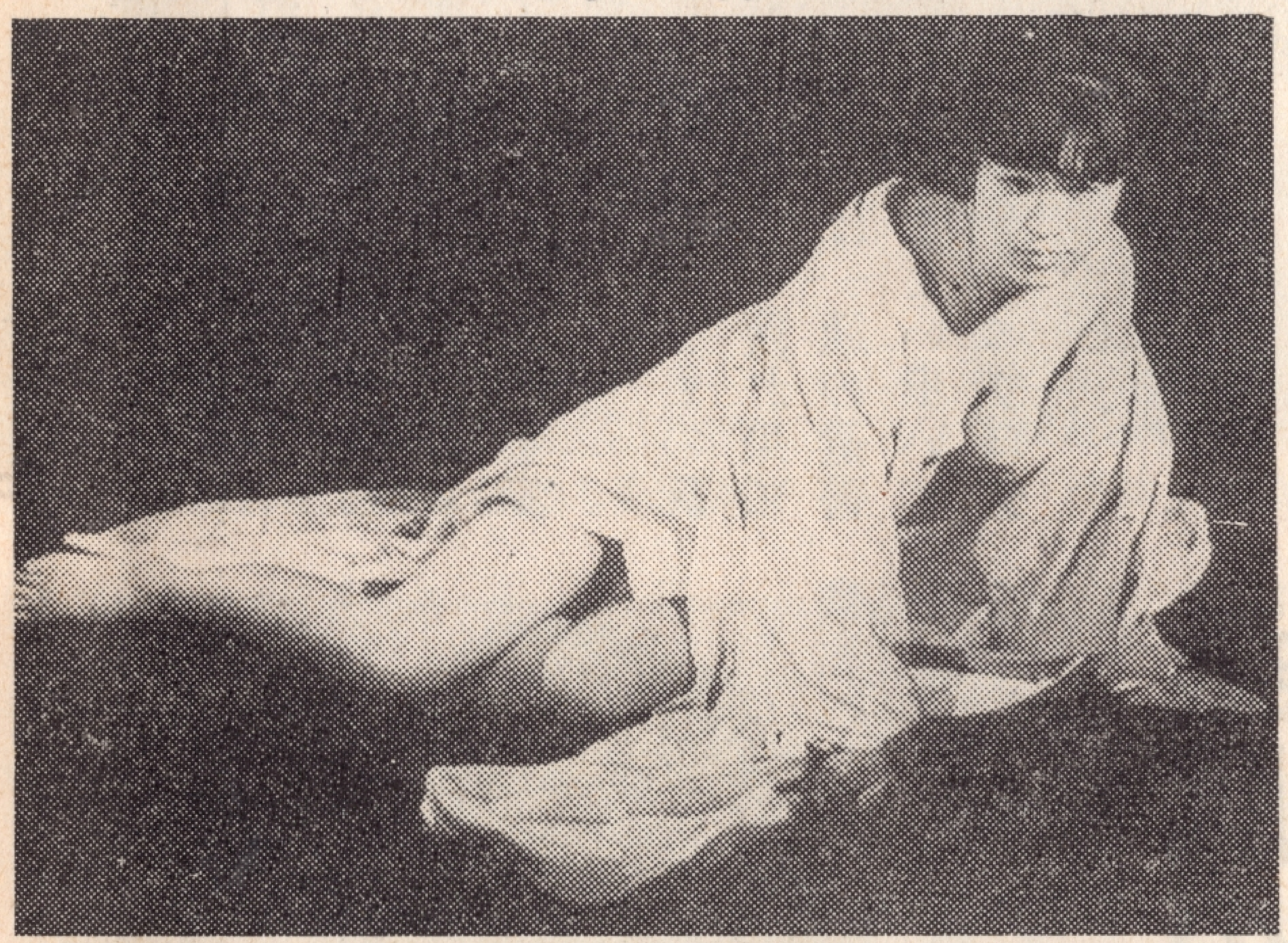
●潔癖な女と街娼の二役を演じる内田高子の新しい魅力

新興成金の和久田（樋口功）は淫売婦の子であったばかりに、みじめな青春を送った。その過去への復しゅうのつもりで、金にものをいわせ元華族の娘綾子（内田高子）との結婚を考えた。美貌で異常なまでに潔癖な女だった。が彼女には隠された出生の秘密があった。

ある夜、酔ってさまよい歩く和久田の前に一人の売春婦マユミ（内田高子二役）が近づいて来た。あまりに綾子に似ている女を見て、和久田は欲望に狂った。それは意のままにならぬ綾子への怒りでもあった。それ以来、和久田はマユミのアパートへしばしば通い、縛り上げ、鞭で打つなどサディスティックな情欲を愉しんでいた。

製作＝日本芸術協会
監督＝向井寛


お色気いっぱいの新高恵子「乳房の週末」


新妻の悲劇を演じる新賀寿美子「激痛」

激痛
＝東京興映配給

●異常な機能に悩む新妻の悲劇と復しゅう

倖せであるはずの新婚の夜美弥子（新賀寿美子）は、はじめて肉体の不具を知って悲劇の奈落へつきおとされる。

死を決めて山の湖に身を投げたが、ちょうど遊びに来ていたズベ公グループたちに助けられる。彼女らの紹介でモグリだがたしかな腕を持つ医者の手術を受ける。「私は、ちゃんと女なのよ」喜びをいっぱいにした美弥子は、夫の元へ急ぐのだったが、途中、高級自動車に乗った中年の紳士に犯されてしまった。

女としての初めての喜びをこんな男たちに……。美弥子は再びズベ公の仲間の元へ帰った。スリ、ケンカ、睡眠薬遊び、次第にやくざの世界へと足をふみ入れていく。しかしこれは男たちへの復しゅうだった。やがて彼女は女親分にのし上がる……。

製作＝小森プロダクション
監督＝小森白

乳房の週末
＝大蔵映画配給

●一人の女の青春を踏みにじる野獣の群れ

若して自らの手で命を絶った女の物語だ。洋子（新高恵子）は、幼くして父親を戦争で失い、母親の再婚先で成長するが、継父になじめない彼女は高校の担任の先生にあこがれ、処女を与えてしまう。

その後、洋子は単身上京しBGとなって働くが、若い女一人には、東京の生活はあまりにもきびしい。お金が欲しい！　そんな洋子は当然のようにコールガールへの道を歩んでいた。

しかし、男のいいままの玩具になることにも、疲れ果ててしまった洋子は一通の遺書を残して街をさまよい歩いていた。

製作＝ヤマベプロダクション　監督＝飛田良

女の砦
＝大蔵映画配給

●有閑マダムの危険な火遊び

浪江（城山路子）の夫（北川邦彦）は仕事の都合で出張が多かった。経済的にも余裕のある浪江には、あまりにも毎日は退屈な生活だった。

ある日、若い男（千早健）と、ちょっとしたことから知り合い、肉体関係ができてしまう。久しぶりの若い肉体に陶酔しているところへ、突然夫が帰宅する。しかし、その場は、なんとかとりつくろったが、しっこくつきまとう若い男が次第に邪魔になってくる。ある日、彼を森の湖へさそいだす……。

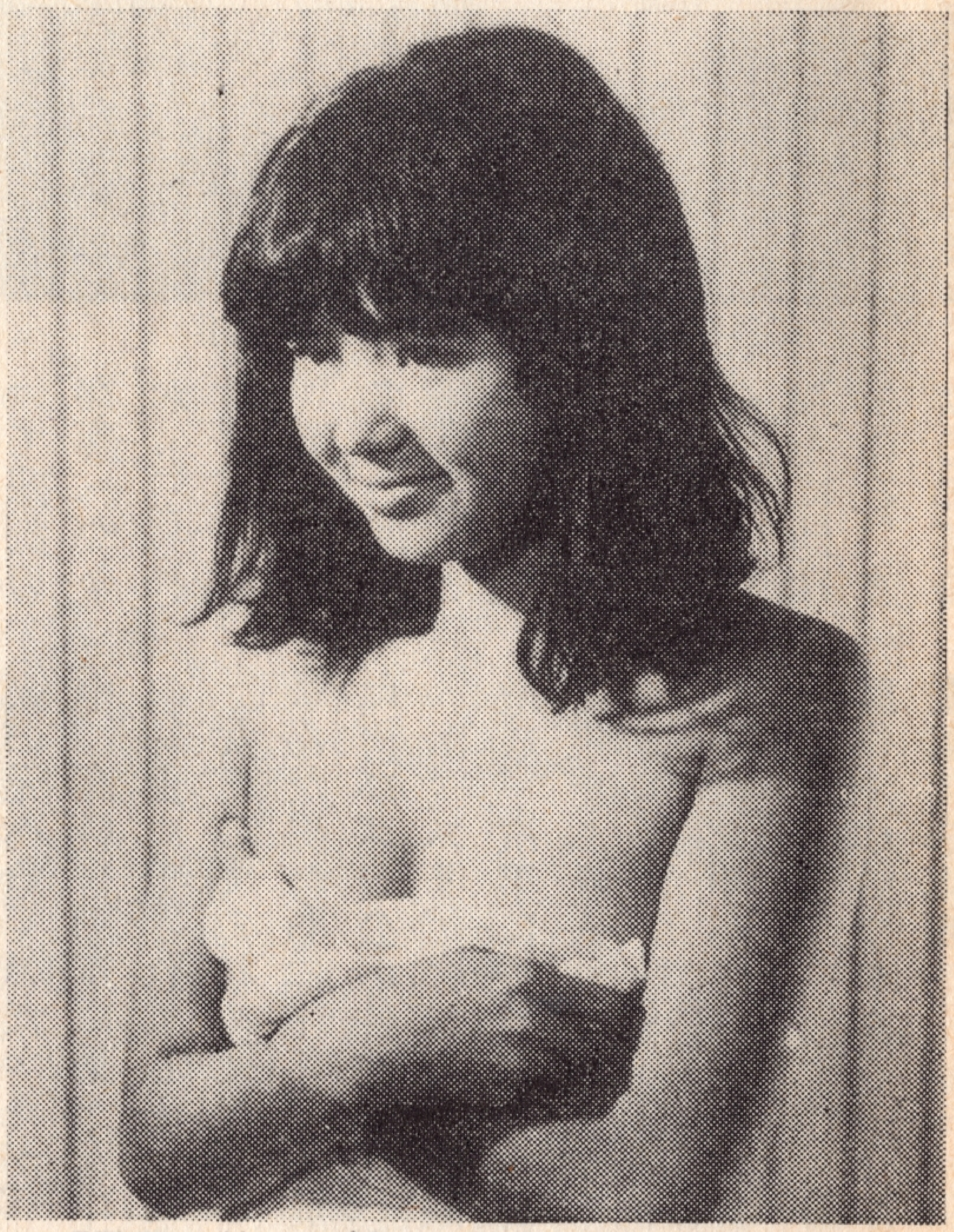
製作＝光映画
監督＝片岡均

柔肌の掟
＝大蔵映画配給

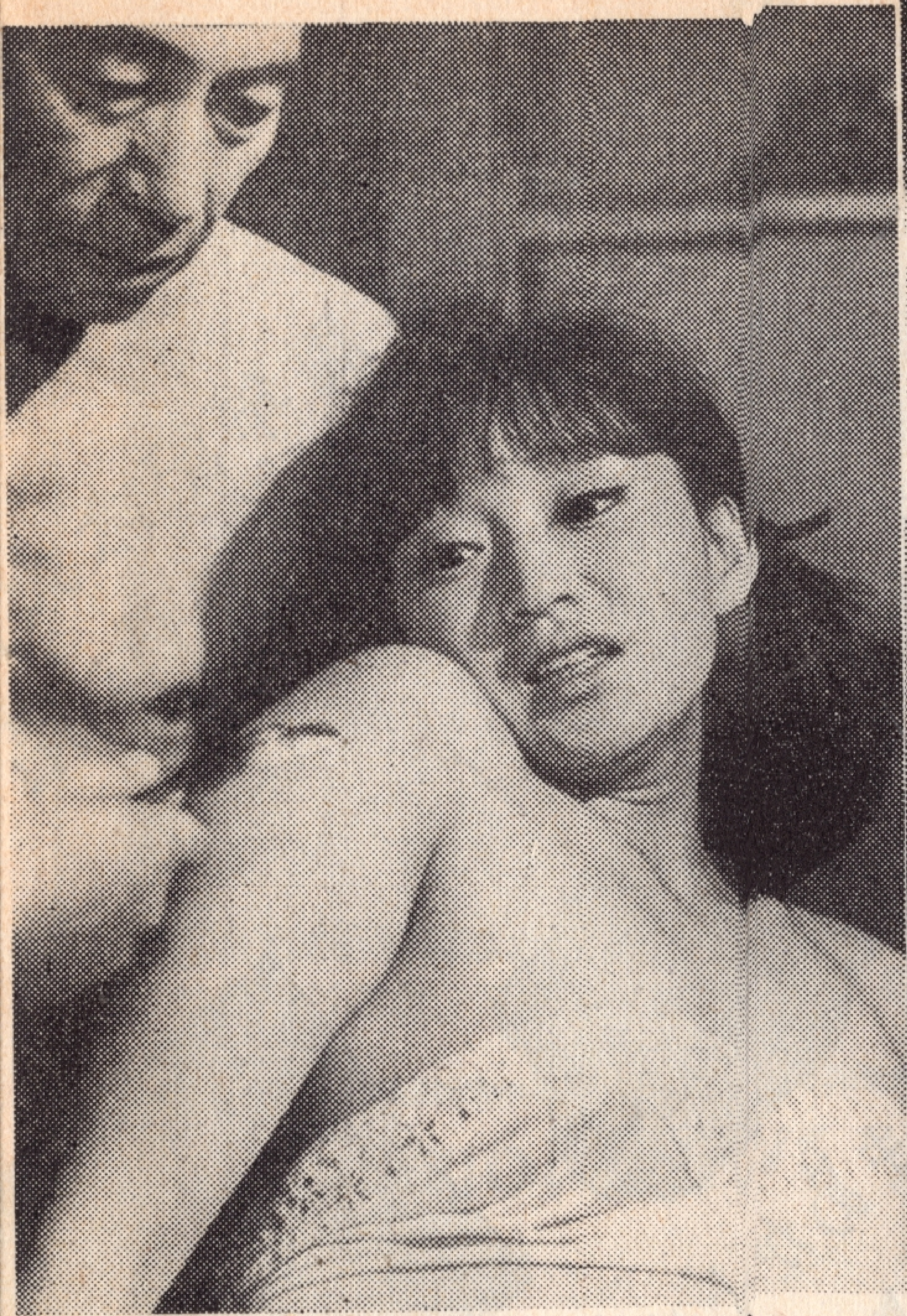
●色と欲のうずまく都会の夜の凄惨な争い

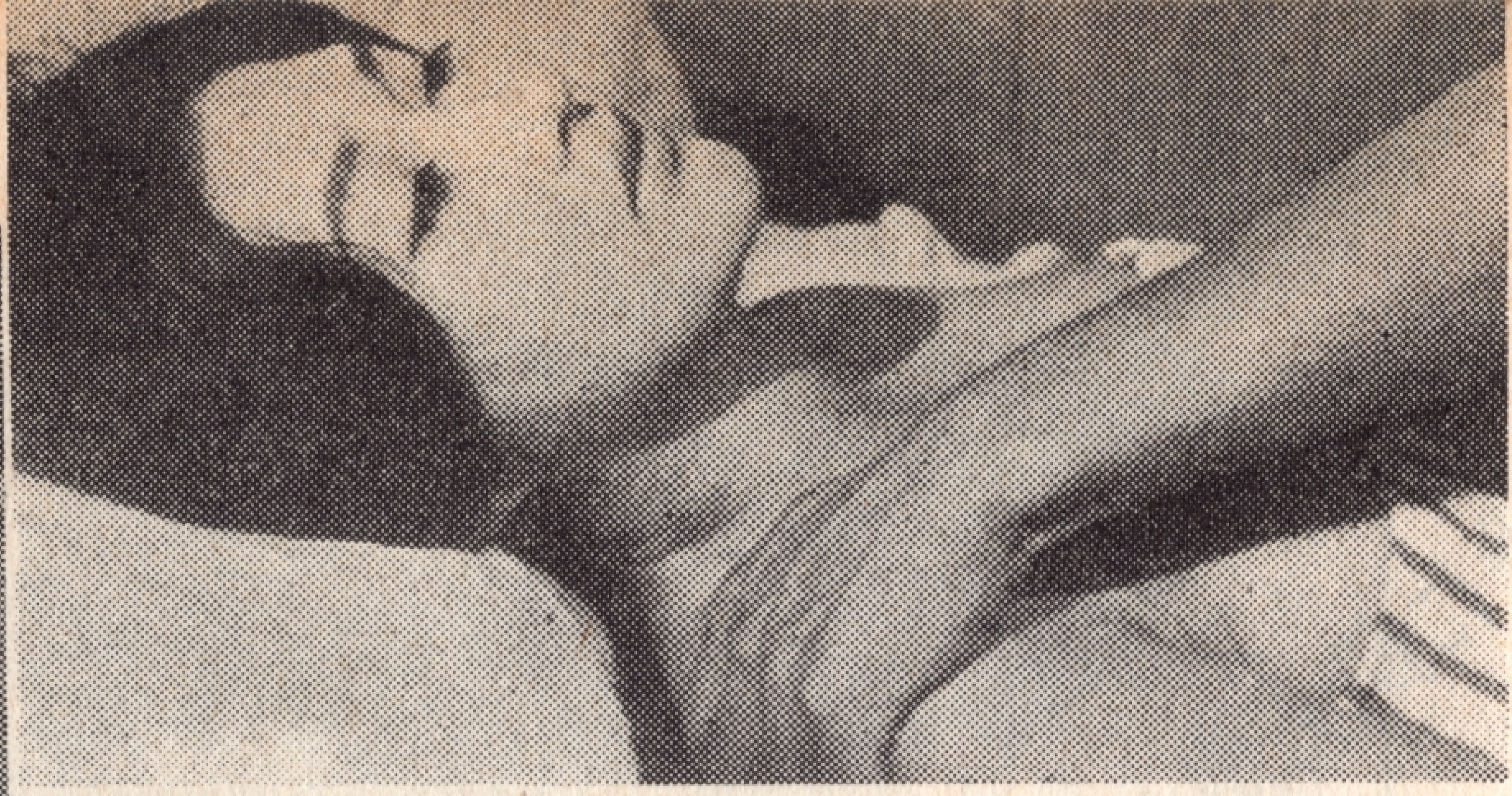
当局の追求が厳しく、解散されてしまった暴力団倉沢組の五郎（山本昌平）は、元兄貴分の辰夫（伊海田弘）の情婦敏江（森三千代）と深い仲にあった。辰夫は、その頃ファッション・モデルの礼子（新高恵子）に夢中だったので、そんなことはおかまいなしだった。ところが、五郎との関係を心配した敏江は、辰夫を昔の殺人犯であることを密告してしまう。辰夫は逮捕されたが、礼子は、街で辰夫とそっくりの男（二役）に出会い一計を思いつく……。

製作＝ヤマベプロダクション
監督＝松原次郎

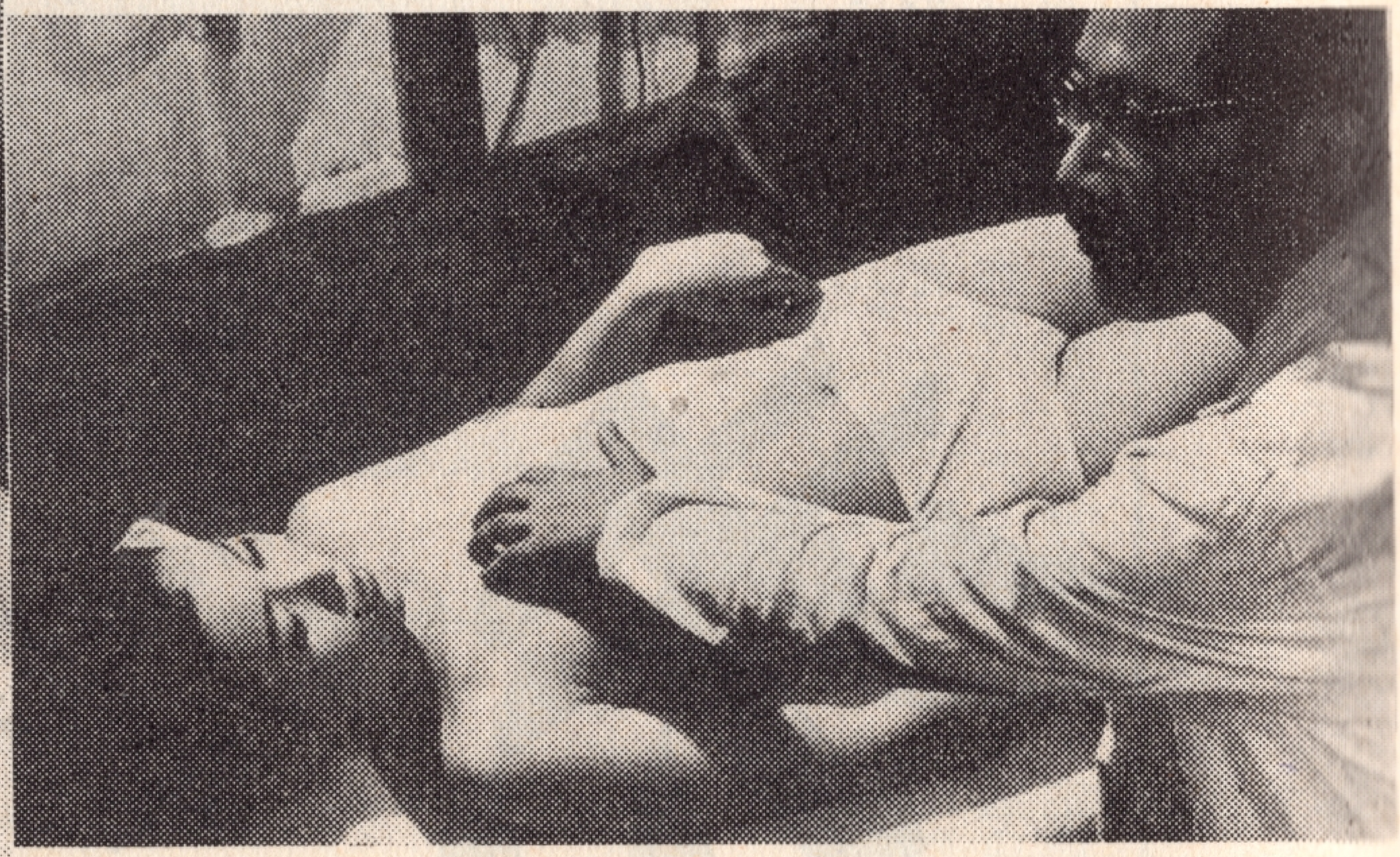


「柔肌の掟」の新しい魅力・原マリ





「女の砦」で有閑マダム役にとりくむ城山路子



「堕胎」は女の哀しい宿命か…

虐げられた女囚を演じる新高恵子

堕胎 ―国映配給

●婦人科医を訪れる客の生態をコメディに描く

性感帯の局部を愛撫するだけでオルガスムスに達してしまう女、ワギニスムでくっついたまんまタンカで運ばれてくる男女など、婦人科医を毎日訪れてくるお客の生態をコメディ・タッチに描く。いってみれば、駅前婦人科医である。

その主人公、丸木戸医師（寺島幹夫）は二十一世紀の性の研究に夢中になり、ついに成功する。人口胎盤の中で、未来の人間像がだんだん成長してゆくのだ。他に桂奈美が共演している。

製作＝若松プロ
監督＝足立正生

禁じられた乳房 ―大蔵映画配給

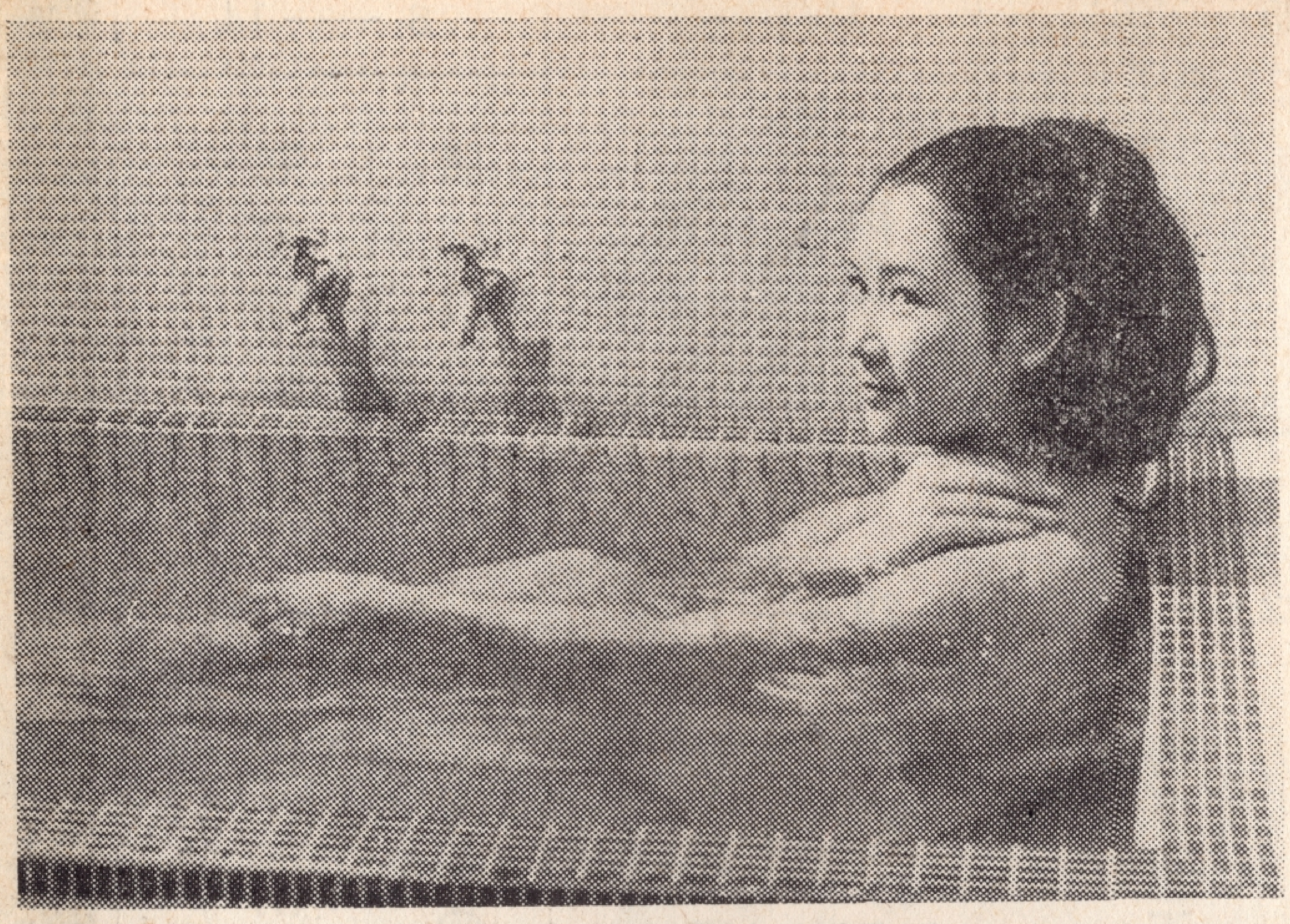
●虐げられた女囚の悲哀を新高恵子が熱演

母親が女中をしている頃、行ずりの男と関係してできた子供が主人公林久美（新高恵子）である。久美は学校を出るとすぐ働きにでた。そしてその肉体のすばらしさが、すぐ評判になってしまった。

そんな時、店にいた五郎（野上正義）にそそのかされて東京へ駈落ちするが、五郎は甲斐性のない男だった。しかし久美は五郎の子を身ごもっていた。五郎から逃れて子を生んだが再び五郎に見つかる。久美は誤って殺人を犯し、女囚として刑務所へ送られてしまう。しかし、久美は三人の女囚と脱送を計る。ただ子供に会いたいというだけで…。

監督＝小川欽也

日本シネマ５周年記念大
●福田晴一監督作品
愛に飢え虚栄にくずれる哀しき人妻の宿命!!
なまめかしい裸女をついばむ鴉の群れ!!
〈シネマカラー〉
赤い情事
内田高子
左京未知子
飛田八郎
増根茂夫
港雄一
N.C.F
日本シネマフイルム株式会社



「指にかける女」で入浴シーンを見せる香取環

PRODUCTION NEWS
プロダクション・ニュース

「悲器」を撮った湯浅浪男監督がひきつづいて映画化したのが「柵の中の女宴」と「1/2の情事」いずれも清水世津の主演だが、「柵の中―」は新東宝で配給の予定。

× × ×

東京興映配給のパートカラー「拷問」（監督小森白、主演香取環）が大ヒット。新宿座の週計で最高を記録した。新宿座が八、三九六名、カジバシ座三、二八九名、池袋シネマリリオ四、一二四名。

× × ×

国映の関東支社が銀座六―四村木ビル五階の国映本社に移転した。これで国映は製作、営業、宣伝が一貫して業務を行なえることになった。

× × ×

・OPチェーンの池袋地区の加盟館「池袋セレサ」が10月限りで閉館になるため、代替館に11月1日から「池袋文芸地下」（人世座直営）が上映館となる。

× × ×

若松プロの「裏切りの季節」（監督大和屋竺）とベルリン映画祭に出品し、国辱映画といわれて話題となった「壁の中の秘事」（監督若松孝二）は去る9月20日から10日間新宿・京王名画座でロードショーを行ない六千八百名を動員、好成績をおさめた。

× × ×

真映企画・宮西プロダクション（代表宮西四郎）がこのほど渋谷区金土町九（持田ビル四階に移転した。電話（四〇九）三九二。

× × ×

国映ではやくも来年のカレンダーを製作した。外国セクシー女優オールヌードの傑作選で、一カ月一枚の十二枚組、新聞半分の大きさ。美しい天然色で、きょ年は品切れで注文に応じきれなかったが、ことしは大量部数を用意している。価格は一部三百五十円で送料は実費。申込みは東京都中央区銀座東六―四村木ビル五階国映株式会社宣伝部あて。

★「成人映画」移転

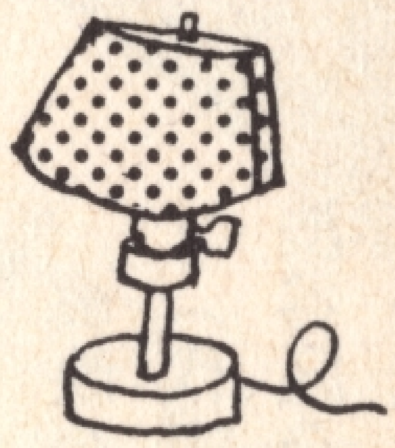
当「成人映画」編集部がこのほど左記に移転しました。業務、スタッフはこれまでと変りなく鋭意努力しております。よろしくお願い申上げます。

東京都中央区銀座西八―一〇
高速道路ビル地下一〇一号室
電話（五七一）六四〇〇

× × ×

10〜12月 O・Pチェーン映画ガイド

期間	作品	配給
10/18——24	柔肌の掟	(大蔵映画)
	人妻の秘密	(明光セレクト)
25——31	異情な体験	(関東ムービー)
	指にかける女	(葵映画)
11/1——7	猟奇	(大蔵映画)
	肉色	(大蔵映画)
8——14	悪の愉しみ	(日本シネマ)
	肌に泣く女	(関東映配)
15——21	女の反応	(六邦映画)
	女高生ジャングル	(関東ムービー)
22——28	情事のテクニック	(日本シネマ)
	裏窓の情事	(大蔵映画)
29——12/5	処女復活	(関東映配)
	快楽の果て	(大蔵映画)
6——12	桃割れ	(大蔵映画)
	乳房のめざめ	(葵映画)

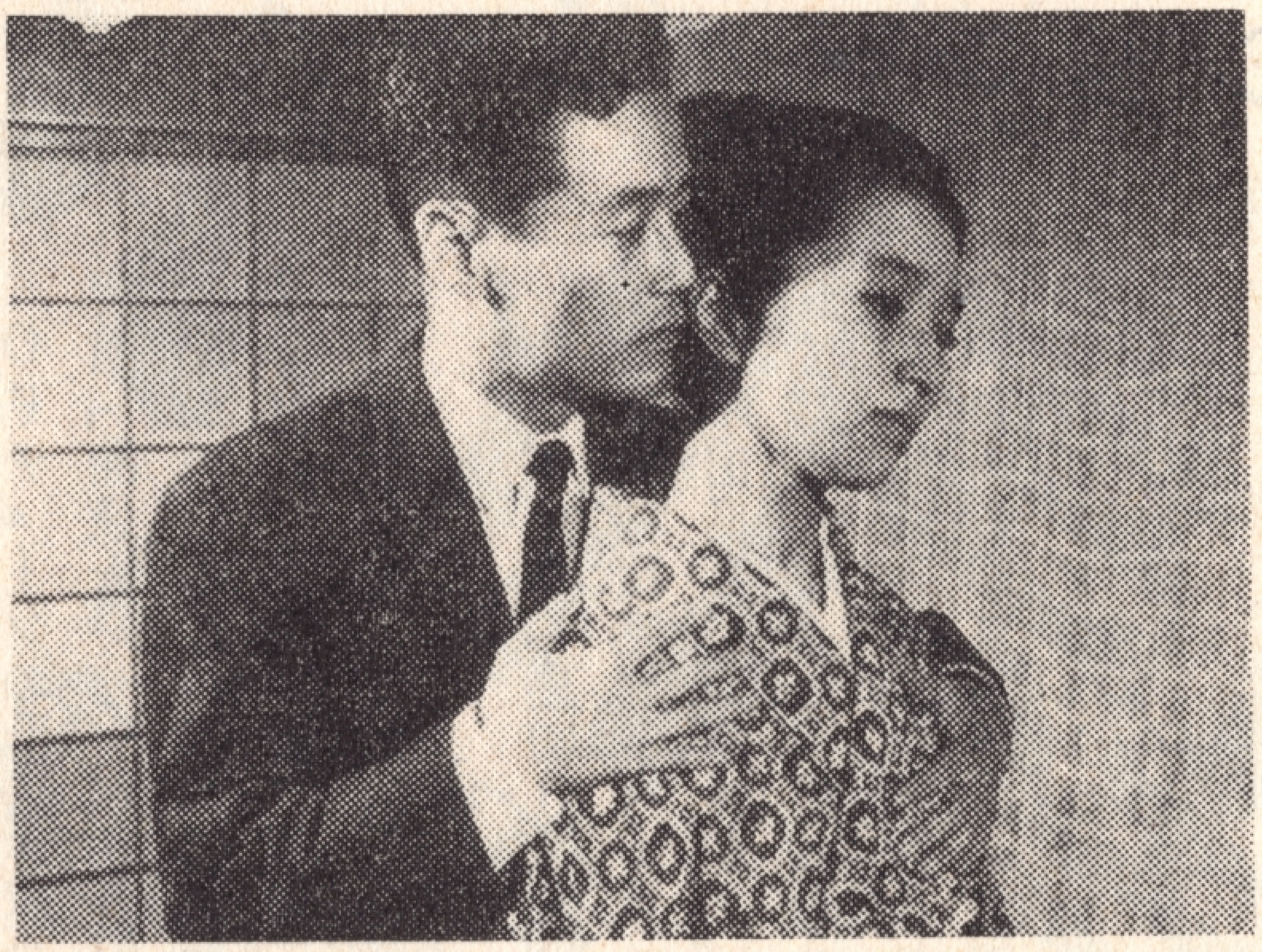


編集室

★…秋のある日、引っ越しました。新橋の駅に近く、立地条件がよくなったせいか、初日に若松監督や国映の矢元部長らが顔をみせ、芸術談義やのみすぎてケンカした話に花を咲かせた。津崎公平、綾瀬マキ、可能かず子城山路子、渡辺監督らが訪れ、編集部もにぎやかさを増した。お近くにおいでの際お寄りください。（K）

★…このところベッド・シーンもすっかりマンネリ化し、せっかく女優サンたちが裸になって頑張っても、少しも迫力がないのはどういうわけか。ピンク映画ファンは、なにも芸術映画をみにくるわけではないが、フランス映画「幸福」や「男と女」などのベッド・シーンの美しさ、迫力には見ならうべきところがあろう。ただ、もつれあって、わめくだけでは、あまりにも能がない。（I）

★…新事務所に移ったら試写室がトナリなのでちょくちょくのぞけて便利だ。試写帰りの監督、女優さんがゾロッと寄ってくれるので、話題にことかかない。次号から〃来訪日記〃欄を設けてどんな話に花が咲いたかを連載しよう！という企画も生まれた。（X）

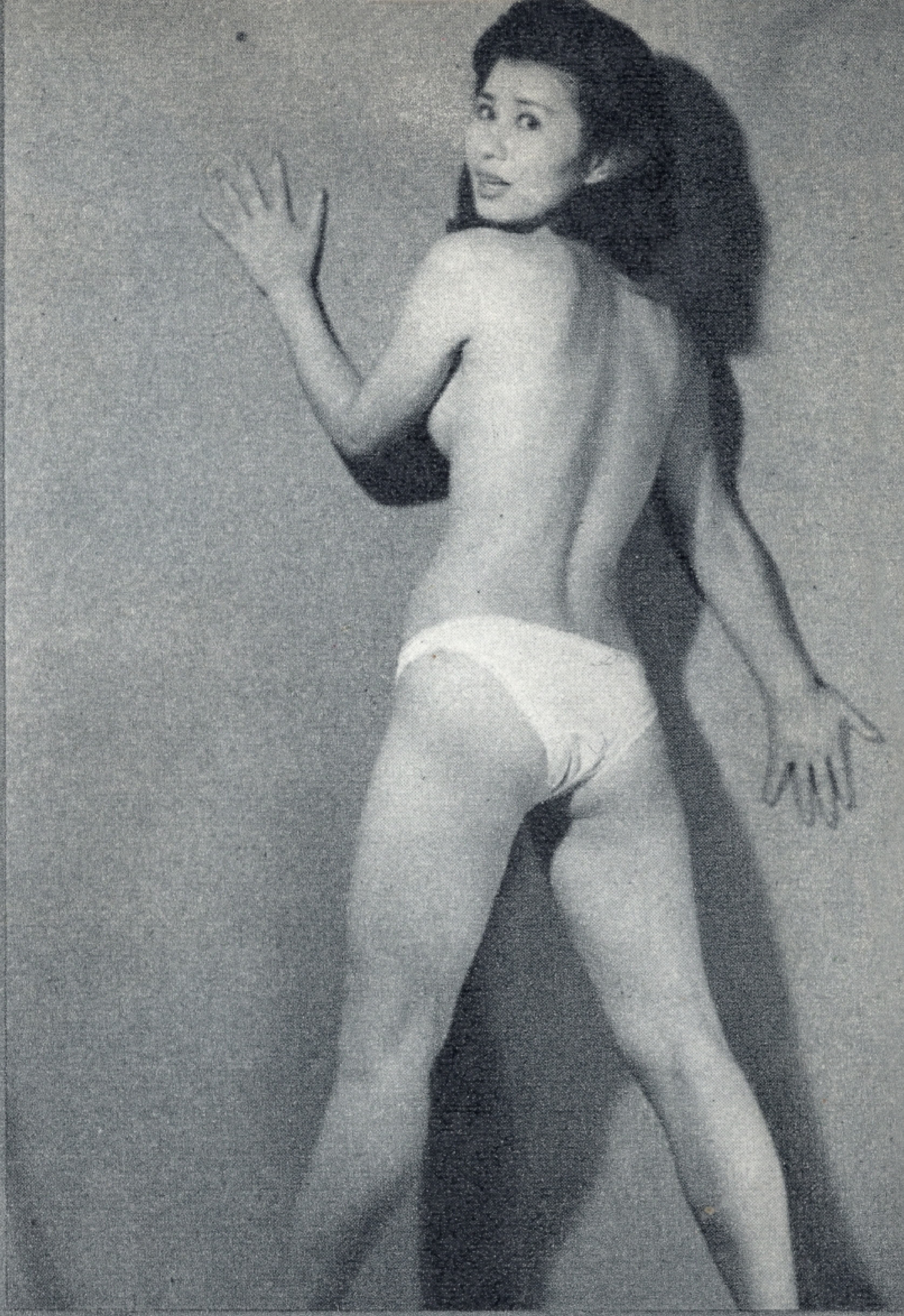

<情欲の黒水仙>より

成人映画

■昭和41年11月1日発行　通巻第13号　毎月1回1日発行　編集兼発行人／川島のぶ子　発行所／東京都中央区銀座西8—10　高速道路ビル地下101号室　現代工房　電話／東京（571）6400
■定価百円

内田高子のセクシーポーズ

CHARM SCOPE



内田高子のセクシーポーズ

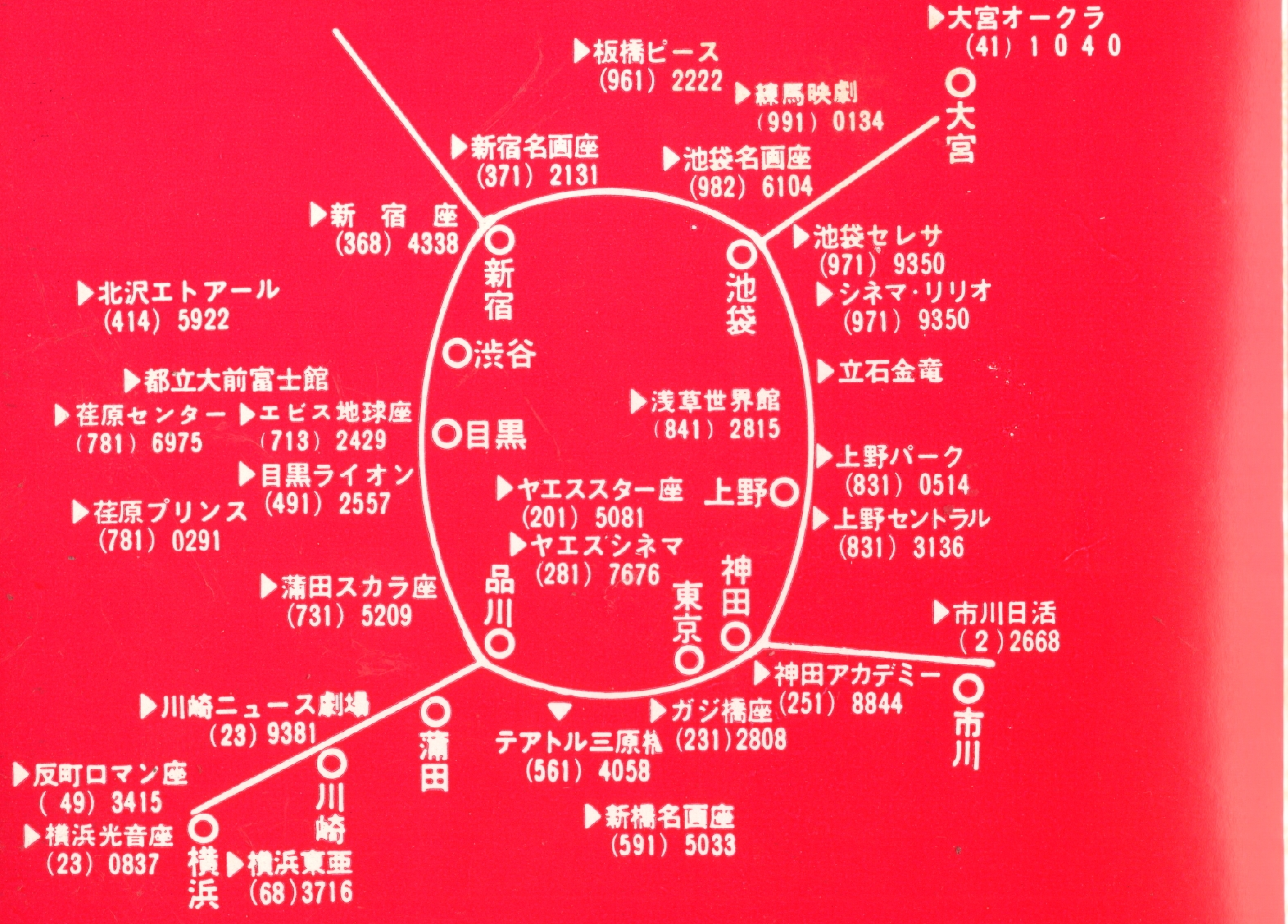
CHARM SCOPE

久々の登場

ダイヤモンドに手を出すなのF・アルヌール

フランソワーズ・アルヌールが入浴シーンをちょっぴりお目にかける。大胆なヌードがみられないのがいささか残念。それをカバーするように登場するのがメルセデス・モリネこぼれるようなオッパイをビキニでストップさせて泳ぐところなんか、実にフランス式セクシーさなのである。

関東地区成人映画上映館一覧表



大阪地区成人映画上映館

難波
▶千日前オリオン座
(641) 5477
▶千日前新オリオン座
(641) 5477

西淀川区
▶野里リボン座
(471) 1082

阿倍野筋
▶阿倍野名画座
(641) 5885

福島区
▶吉本キネマ
(451) 6793

布施市
▶布施映劇
(721) 4990

城東区
▶放出シネマ
(961) 0664

守口市
▶守口セントラル
(991) 0049

東淀川区
▶十三若草劇場
(301) 5929

天王寺区
▶鶴橋松竹
(761) 9752

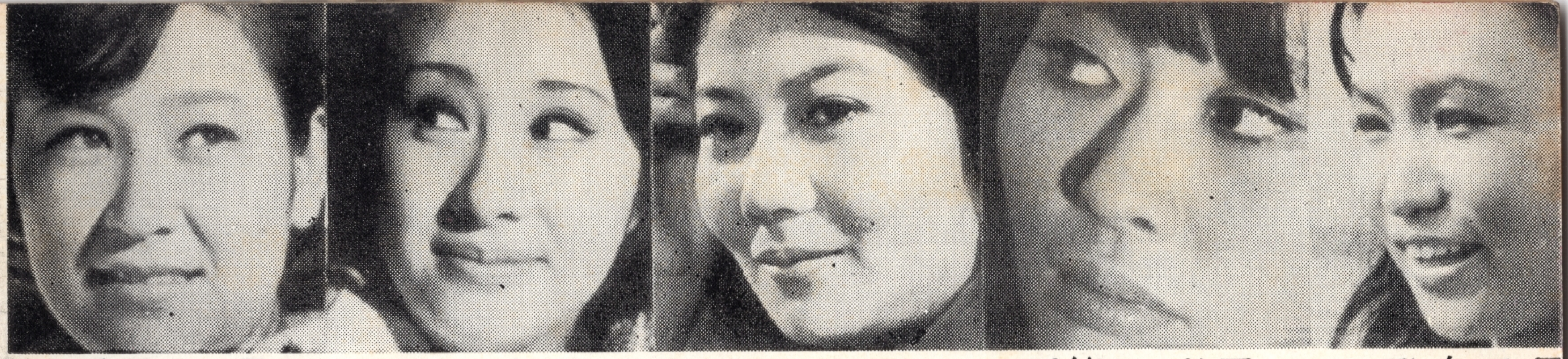
都島区
▶都島会館
(951) 4651

北区
▶天六映画劇場
(351) 9138

大阪駅

名古屋地区成人映画上映館

○浄心ハイツ
(531) 4118
○上飯田劇場
(991) 5714
○守山飄映
0560-(79) 2082
○栄生グランド劇場
(551) 6379
○タカラ劇場
(941) 6076
○堀川映画劇場
(231) 0193
⊙今池フジ
(731) 4763
○太閤劇場
(551) 2353
⊙テアトル希望
(541) 3044
○曙文化劇場
(731) 3806
⊙日活シネマ
(241) 2345
○鶴舞劇場
(881) 8494
⊙名画座
(231) 3211
○日比野東映
(671) 0407
○雁道劇場
(881) 8069
○八熊文化劇場
(321) 8194
⊙南映画劇場
(811) 4906
○新郊劇場
(811) 2730
○名港文化劇場
(661) 1269
○名南劇場
(811) 6586



香取　環　　松井康子　　谷口朱理　　可能かず子　　飛鳥公子

悲器

独立プロ初の十大女優総出演による超大作!!

監督／湯浅浪男
撮影／中条伸太郎

国映株式会社
製作／矢元照雄

国映

桂　奈美
清水世津
奈加公子
美矢かほる
橘　桂子

月刊「成人映画」通巻第十三号　昭和41年11月1日発行　編集兼発行人　川島のぶ子　発行所／東京都中央区銀座西八ノ一〇　高速道路ビル国映センター一〇一号室　電話（五七一）六四〇〇　現代工房　定価百円